電車から降り、晴海の地へと足を踏み入れる。
冴えた青空に、通りを吹き抜ける海風。鎧戸つきの出窓から靡く、白いレースのカーテン。何処からか漂ってくる、麺麭の焼ける香ばしい匂い。通りでは余所行きの服に身を包んだ白人の子供が、額が良く見えるようにと母親に前髪を撫で付けられ、眉を顰めている。
気に入りの其れらに目を細めることも無く、一瞥をくれただけで通り過ぎ、贔屓にしている雑貨屋や仕立て屋を素通りして海軍省方面へと足を向けた。
白い軍服に身を包んだ見張りの面々が時折ちらりとこちらへ目線を向けるが、直ぐ様興味を失ったかのように元の姿勢に戻るのを目にし、此処も相変わらずのようだと失笑した。とはいえ、見抜けという方が無理な話か。海軍は陸軍とは異なり、一般市民が海軍省の傍近くへ足を運んだところで咎めたてたりはしない。現にすれ違う者たちは皆、何処かへ散歩にでも行くかのように寛いだ動作で歩を進めていた。此の自分だって一見すれば、ただのおのぼりさんにしか見えないのだろう。
くだらないことを考えながら歩を進める内に、目指す建造物が目に入った。門の直ぐ傍らで、正に読んで字の如く直立不動で立つ其の姿にふと笑いが込み上げる。ここ数年で経験を積んだか。それなりに見られる面構えになっているようだ。
斑駒の一件の折からどうにも見覚えがあるとは思っていたが、中々に思い出すことのかなわなかった其の記憶を掘り起こすことが出来たのはつい先日のこと。いやぁあの頃は俺も若かったから、等という言い訳は何の意味も為さないだろうし、そもそも今となっては口にすることすら憚られた。少年が目にしたという、現在の彼の活動中の姿を実際に目にしてみたいと思わないでもないが、それでも

話を聞く限りに於いてはどうにも詰めが甘いように見受けられた。しかしながら秘密将校として活動する上で非常に不利となるであろう、あの顔面にある特徴的な黒子の存在を考慮に入れれば、彼はなかなかに優秀な部類に入るのかもしれない。

彼には、つい先日我が探偵社を巻き込んだ騒動に関して一言どころか二言三言、若しくはそれ以上に言いたいことがあったのだが、それも最早問うまい。彼自身、自らの力不足を恐らく誰よりも自覚しているだろうから。

躊躇うことなく真っ直ぐ向かってくるキャメルの背広姿を逸早く目を留めた海軍将校は、こちらが声をかけるよりも早く反応した。

「む、――貴様は、」

へらりと笑いながら帽子を取り、軽く一礼する。

「やぁ。その節はどうも。‥‥超過勤務手当ても頂かずに、」

「ふん、態々こんな所まで下らぬ厭味を言いに来たのかね、所長殿」

「まさか」

どうしたって互いに愉快になれない類の戯言を早々に打ち切り、本題を切り出した。

「ライドウが、帰ってこない」

「‥‥」

「もう何日も、だ。何の連絡も無しに。‥‥こんなことは初めてだ」

「‥‥」

「何か思い当たることは、」
僅かな変化も見逃さぬよう、真剣な眼差しでその顔を見据えながら問い質す。暫しの沈黙の後、諦めたように溜息を漏らしながら件の海軍将校――川野定吉は重い口を開いた。
「民間人に話して聞かせて良い話ではないが、いくら高名なサマナーとはいえ未成年のライドウ君を巻き込んだのは我々だ。保護者である君に対し、説明を行う義務があるだろう。‥‥だが我が軍の機密に抵触しない範囲でしか口には出来んぞ」
「ここまできて今更つまらん御託なんぞ言うな。――何があった。率直に話せ」
不遜な物言いをする自分の態度に不快を覚えたのか、僅かに目が険しくなった。それに愉悦を感じることも無く無言で先を促す。
「君も知っての通り、彼は宗像の企てを阻止する為に単身和電イ号基へと潜入し、それ以降は‥‥消息を絶っている」
「‥‥」
「現段階で、如何なる報告も為されていない。彼と一切の連絡も取れていない状況だ」
嗚呼。
手が震えそうになるのを堪える。
そんなことはとっくの昔に判ってンだよ。
既に其の手の情報は入手していた。元より、信頼の置けない筋など持ってはいない。だがそれでも、――それでも、間違いであって欲しかったのに。

――間違い、‥‥どちらが。
嘆く心と裏腹に、脳裏で何かが囁いた。
お前が何より気にかけているのは、己が助手である少年の安否か。それとも、変わってしまったのかもしれない【あの人】の真意か。はたまた、あの人の手によって少年が、
――否。今はそのようなことを考えている場合ではない。
理性と感傷の狭間で静かに混迷し始めた思考を軽く首を振ることで振り切り、伏せていた目を見開いて相手を見据える。
「ライドウは、‥‥大丈夫なのか、」
「――すまないが、我々も彼の安否を案じているところでな。具体的なことは何も判明していない」
「――くそっ」
忌々しく舌打ちし罵る貝分に、定吉はすまないと再び口にした。だが其れに構わず背を向ける。
「待ちたまえ、何処へ行くつもりだ。‥‥もうじき、陸軍省方面から正式に帝都全土へ向けて軍事戒厳が発令される筈、軽挙妄動は慎んだ方がいい。殺されても文句は言えんぞ」
「うるせェよ。‥‥俺がどうなろうがお前の知ったことじゃねェだろ」
「其の通りだ。――しかし私には責任がある」
急いでいるというのに一向に退く気配を見せない相手に苛立ち、一刻も早く開放されたいがために行き先を告げる。どうせこいつに俺を止める事は出来やしないのだ。

「宗像さんを追う」
「何だと、‥‥だが、今彼は和電イ号基ではなく、」
「知ってるさ。――地下の軍事施設。其処に居るンだろ」
「ライドウ君から聞いたのか。しかし彼が利用した入り口はもう、」
「嗚呼もう何時までもグダグダと判りきったことを。――ンなモンはどうにだってなる。未熟なお前にゃ未だ未だ判ンねェだろうけどな」
「何、」
「もう行くぜ、じゃあな」
ひらりと片手を上げ、再び踵を返し駅へと向かう。呆然と自分の背中を凝視する視線を感じ、嗚呼勘付かれちまったかなと些か眉を顰めないでもないが、しかし今の自分にとって奴が何をどう思おうと、知ったことではないことも確かだった。

「ご苦労でした、異なる時空の十四代目葛葉ライドウ。‥‥しかし喜んでいる時間はありません。一刻も早く、残りの角柱を集めるのです」
こちらの時空へ降り立って後、元の世界へ戻る為の秘宝『天津金木』を手にする為にヤタガラスより課された試練の内『地』の試練――異界桜田山に於いてからくりを解き、守護者たるオオミツヌを打ち倒し角柱を入手したのはつい先程のことだ。
どうやら時空の歪みは様々な事象の変化を生み出すと同時に時間軸まで変化させたか、こちら側は

あちら側のどうやら数ヶ月前といった頃合であるらしかった。
しかし異界桜田山にあの鉄塔が存在していたということは、こちら側でも超力兵団計画が確実に進行しているということに他ならない。些か気に病まないでもなかったが、目付けの黒猫が言う通り、所詮『異物』でしかない自分たちが無闇に干渉することは避けねばならず。こちら側の自分たる雷堂と、姿を垣間見ることすら出来なかったこちら側の彼に全てを託すしかなかった。
――――『彼』。
じくり、と胸が痛んだ。
こちら側へ降り立って、それなりに時間が経ってしまっている。あちら側で和電イ号基に潜入していた期間も含めると、探偵社を出てより過ぎ去りし時間は相当なものだろう。其の間中ずっと連絡が取れないで居るのだ。屹度、心配しているに違いない。何より此処最近様子のおかしかったことが気にかかる。一刻も早く、元の世界へ――自分が在るべき場所へと帰り、温かく迎え入れてくれる彼の姿を此の目で確かめたかった。
「判っている。ではヤタガラスの使者よ、火の角柱、其れを持つ守護者の下へ、」
「待て、」
衝動の欲するがまま、ヤタガラスの使者に告げようとした言葉を遮るような形で雷堂が口を挟んだ。
「何だ、俺は急いでいるんだ。お前如きに関わっている暇など、」
振り向きざま、苛立たしさを隠そうともせずに言葉を返すと、雷堂はふんと鼻先で失笑し、自分と良く似た形の口を開いた。

「こちらとしても貴様と戯れるような趣味など無い。‥‥ただ、そのような無様な有様で、角柱の守護者の相手が務まるとでも思っているのかと我は尋ねているだけだ」
「なんだと、」
「威勢だけは一人前で結構なことだが。――正気か、」
小莫迦にした言い様に思わずいきり立つが、それを窘める様に足下から黒猫のにゃあ、という声が響いた。
「待たんか小僧。‥‥そやつの言う通りだ。先ずは先程の戦闘で負傷した箇所や仲魔を癒し、物資を補給してから挑め。今の状態で試練に挑むのは無謀以外の何物でもない」
「しかしゴウト、俺は、」
「焦るお前の気持ちは重々承知している。だが急がば回れというだろう。万全の体制で臨み、確実に試練をこなしていくことが何よりの最善の手段なんだ。分かったな、」
先程消費した弾丸や道具の数々をざっと思い返してみれば、己が目付けの言い分は確かに反論する余地もなく。少年は不承不承といった風に頷き、自らの感情を宥める為目を伏せ大きく息を吸い込んでは吐き出した。暫しの後、再び見開いた其の目の中に常ならば何時も宿っている冷静な光が戻ったのを確かめ、黒猫は安堵した。
其の様子を黙って見ていた雷堂は、再びふん、と鼻を鳴らして一笑した後、腕を組んだまま大木に其の長身を預け、目を閉じた。一方の自分はと言えば、相対しているだけで自然と沸き起こってくる奇妙な反発心を持て余し、これ以上失態を見せる訳にもいかないので足早に彼の前を通り過ぎること

を選んだ。
どうにも仲の悪そうな小童二人を他所に、互いに何がしかの共通点を見出したらしき二匹の黒猫は通り過ぎざま、目線をささっと交わし、苦笑した。
連綿と続く石段を下り、黒猫が口を開く。
「‥‥そんなに気に喰わんものか、」
「何がだ」
「知れたこと」
息も切らさず短い言葉だけで会話を交わしていく。石段を下っている間に長丁舌をしては、舌を噛んでしまうおそれがあるが故に、此処で交わす会話は自然素っ気無いものとなる訳だが、今は片方が不機嫌なのも加わったお陰で些細な言葉一つにも刺々しいものが含まれている。全くやりにくいことこの上ない。
「‥‥分からない。奴の指摘の正当性は俺も認める。認めるんだが、――あの知ったかぶったような口調がどうも癇に障ってな」
こんなことは初めてだ。
少々落ち込み気味に呟かれた弟子の言葉に黒猫はふむ、とだけ応え、後は共に無言で駅舎への道筋を辿る。
どうやら雷堂の前では常とは異なる精神状態に於かれ、冷静な対応をとれなくなってしまうことに自分でも気付いてはいるらしい。しかし其の反応は片恋相手を前にしたときの其れとは異なり、どち

らかというと子供じみた反抗心によって生じるものであるように見受けられた。本人も少なからず其れを自覚しまた恥を感じているらしく、其の背中で以って『どうかこれ以上突っ込まないでくれ』と懇願しているように見受けられた。

――――まぁ分からなくもない。

無人の券売所で筑土行きの切符を買い、改札を通り並んで電車を待つ。

此の小生意気な弟子は未だ青年にも届かぬ若造であるにも拘らず、遥か飛鳥の古より連綿と続く葛葉という家系に於いて、実力ある者のみが受け継ぐことを許される四つの名のうちの一つ、【ライドウ】を手にした程の技量を持っている。自然其の矜持は高いものとなるだろうし、其れを裏付ける実力もまた相当なものだ。しかし其の年齢にそぐわぬ優秀さ故、同年代の相手に、まるで頭の中を覗かれたかのようにあれやこれやと言い当てられる経験など皆無だったのだろうことも容易に察せられた。

しかも其れを為す相手は他でもない、異なる時空に存在する自分ときたものだ。

見下したくとも当然其の内に秘めたる実力が自らと同程度であろうことは予想に難くなく。これまで同年代の相手に実力で肩を並べられたことも無かったであろう小僧にとっては、其の事実がまた気に障る要因の一つとなっているといったところだろう。

つまるところ、何もかもが初めてづくしで。しかし常であればもっと冷静に行動できるのだろうが、此処へ飛ばされるまでの状況が状況だ。惚れた相手は何やら危うげな雰囲気を振り撒いていたし、つい先日など海軍にとっ捕まった挙句暴行を加えられて帰ってきた。幸い深刻な状況には至らなかった訳だが、その後も様子がおかしいことには変わりなく。和電イ号基に乗り込む際にも意味深な言葉を

吐いて暴威弾なんて物騒なものを手に見送ったあの賢しげな男が、自分たちの姿が消えたあちらで今頃どうなっているか。正直自分にも予想がつかない。莫迦なことを仕出かしてなければ良いんだが、と此の自分でも気に病むほどだ。感情の乱れがちな未熟な小僧には尚更、気にかかって仕方ないのだろう。

しかし今、最優先で考えるべきは、異界銀座町に於いて如何なる敵が待ち受けているかに関することだ。ひよっこの精神が不安定であるならば尚のこと、此の自分が確りしてやらねば、何の為の目付け役だか分からない。

遠くから姿を表し始めた車輛を目に留め、黒猫は髭をぴんと伸ばし、自身により一層の気合を込め直した。

「――――やぁ、」

「あら珍しい。まさかと思って来てみれば。てっきりお見限りかと思っていたンですけれど、今日はどういった風の吹き回しなんです、」

女将さんお客さんです、と呼び止められ表まで出て来て見れば、其処には此処数ヶ月の間とんと姿を見せなかったかつての常連の男の姿。

浮き沈みの激しい此の世の中、羽振りの良かった客が突然姿を見せなくなったと思っていたら取引で失敗して夜逃げしていました、なんて話も珍しくは無い。だが此の男の生業はどちらかといえばやくざなもので。そもそも探偵というものがどのような活動をしているかについて自分には精々紙に書

かれたものの範囲でしか知識は無いが、左程儲かるようなものではないように思えた。しかしそれでも此の男には矢鱈と羽振りの良い時が存在し。内心首を傾げつつも其れは其れとして、此の男の存在を重宝してもいた。

何せ此の男ときたら一体どこで経験を積んだものやら、大抵の難事をなんでもない顔をしてあっさりと片付けてしまう。またそうやって世話になった諸々のことは、決して店の外に出す訳にはいかない類のものたちばかりで、此処銀座で老舗料亭なんてものをやっている自分たちにとって、其れはどれ程助かったか分かりゃしなかった。

尤も、先だってはそのやくざな職業のお陰で、海軍なんて物騒なところに引っ張られる羽目になっていたようだが。

にこやかに微笑みながらこちらを見詰めてくる男の姿をざっと検分し、どうやら本当に大事にならずに済んだようだと内心胸を撫で下ろした。

今もそうだが、此の男は他の男たちに比べて随分と愛想が良く、外見もまた優男風なので、そういったお堅い方面から誤解を受け易い人物だった。ほんの少し親しく接するだけで其れが全くの誤解であることは、それなりに人生経験を積んだ者であるなら直ぐにでも分かりそうなものだが、そうはいかないのが現実というもので。海軍に拘束される羽目になったのも、恐らくはそういった誤解が元ではないのだろうかと部外者ながら案じていた。

――だが。

気を引き締めて上方にある男の顔を見据える。

だが其れと此れとは別だ。払うべきものはきっちり払ってもらわないと困る。年末に逃げ切れば借金やツケが綺麗さっぱり消えてなくなった江戸の時代は、近代化を推し進めた明治の世を経て遥か彼方へと過ぎ去り、今や大正モダニズムの世の中だ。自分たちの世界では確かにツケという習慣が未だ生き残ってはいるが、其れにだって限度がある。

「うちに催促の電話まで寄越しておいてよく言うよ」

あの後、うちの助手と黒猫から揃って冷たい目で見られちゃってさ、そりゃアもう大変だったんだから。

情けない顔で同情を引いてみせようとする男に厳しい一瞥をくれてやりながら鼻で笑う。

「自業自得だよ」

「きっついなぁ、そりゃア俺が悪いのかもしれないけど、そんな目で睨まないでくれよ。折角の美人が台無しだぜ、」

「今直ぐにでもうちのツケを支払ってくだされば、菩薩の微笑を浮かべて差し上げても宜しいんですけどねぇ」

そう切り返すと、はたはたと帽子で顔を仰ぎながら苦笑して男は参ったなぁ、と呟いた。そしてその後何を思い出したのか、くるくるの髪を片手でいじり拗ねた口調で詰った。

「というかさぁ。うちのライドウに其処まであけすけに喋らなくったっていいじゃないか。所長としての俺の威厳が……」

「あら、貴方のような方でも保たなければならないような面目をお持ちだったんですか。其れは存

じ上げぬこととはいえ申し訳ありませんでしたね。でもうちだってお遊びでこんな所で店出してる訳じゃありませんので勘弁してくださいよ」
男につれない返事をくれながら、話題に出た少年の漆黒の立ち姿を脳裏に浮かべる。
初めて会った時からずっと変わらない、背筋をぴんと伸ばした礼儀正しい其の姿。年に似合わぬ落ち着きを身に纏ったあの少年。しかし所詮は未成年でしかなかった彼に、大事な客の話をするなんて、と当初は随分と躊躇われたものだった。しかし此の男の助手として働いていると聞いたからこそ、幾度か情報を提供してやる気になれたのだ。
子供のようにふてくされている男の面をちらりと見遣る。
だが今、少しでもそのような裏事情を口走ろうものなら、また調子に乗ってのらりくらりと逃げられてしまうことが厭になる程判りきっている。何より実家の危機も助けられ、また其の口の堅さで、少年はすっかり自分の信用を勝ち得えてしまってもいたので、此の場は好きなようにやらせていただくことにした。
「ライドウくんなら、だらけた貴方のお尻を確り叩いてくれそうだったもんですから、ついうっかり」
ほほほ、と態とらしく笑ってやった。
「まぁ確かにねぇ。確りしてるからなぁあいつ」
「本当、あなたの助手には勿体無いくらいの子ですよ。大事にしておあげなさいな、」
「はいはい、判ってますよ」

皆ライドウの味方なんだもんなぁ、とぼやく男へ向かってそりゃ当たり前でしょう、と言い切った。
「それもこれも鳴海さん、貴方さえちゃんと・・・・、」
「嗚呼、判ってる判ってる。――今日は其の事で此処へ来たんだし」
目を見張った。なんだかんだと色々言ってはみたものの、どうせ今日も逃げられるんだろうと心の何処かで諦めが入っていたものだから、尚更驚きも増す。だが自ら支払いに来たのだと言うならば、こちらとしても歓迎すべきことであって。下手に邪険にでもしてへそを曲げられては困ると、我ながら手の平を返したかのような満面の笑顔を浮かべ、それはそれは有難うございます、と口にするが、男には一向にそれらしきものを差し出す気配が感じられない。疑問を顔に浮かべると今は持って来ていない、と言う。
「それじゃア何時返すって言うンですか、」
いい歳をした男の口から飛び出した子供の使いのような返答を聞き、思わず呆れて問い返すと詳しいことは判らないんだが多分二、三ヵ月後には、とこれまた曖昧な言葉だ。
「なんだってそんな、」
「だから、――支払いは、生命保険で」
真顔で返され、虚を衝かれた。
科白の意味が頭に染み渡り、思わず噴出する。
元からきわどい洒落を好む男であったが、まさか自らの命まで話題に使うとは。
「あははは、全く何言ってンですか、もう。そんな縁起でもないこと言って、またライドウくんに

叱られますよ」
笑い声を上げながらそう窘める自分へ向かって男は苦笑し、それじゃアそう言うことで、と帽子を上げ背を向けた。
今日こそは、と意気込んで催促したものの案の定やり込められてしまった。だがこんなに笑わされてしまっては最早真面目に問い詰めることも出来やしない。自分はそんな野暮な人間ではないのだ。
全くもう、覚えてらっしゃいよ、と腹の中で呟きながら、遠ざかって行く男の細い後姿を見送った。

「いらっしゃい」
ぎぃと蝶番が軋む音と共に扉が開き、現れた新たなる客へ向かってマスターが声をかけた。相変わらずいい声、と半ば感心しながら曹達水を片手に、つい先ほど編集長に突き返しを食らってしまった原稿の推敲を続ける。さっと紙面に影か差し、直ぐ傍らに人の気配を感じたと思った瞬間、耳慣れた声が耳朶を打った。
「やぁタヱちゃん、昼間からこんなところでサボタージュ、」
「失礼ね探偵さん、貴方みたいな怠け者と一緒にしないで頂戴な。それから、私は葵鳥ですと何度言ったら其のもじゃもじゃ頭は理解して下さるのかしら」
開口一番の其の物言いに、何時ものことだと分かってはいてもついつい噛み付く。其れと同時に手に持っていた原稿用紙とペンを彼に突き示し、何ら疚しい行為はしていないと胸を張った。
「私が今こうして手に持っているものが原稿以外の何に見えるって言うの、言ってごらんなさい、」

彼は突き出された原稿の紙面と怒った自分の顔をしげしげと交互に見て、やがて得心した顔でにやりと笑った。
「ははぁ、さてはデスクに突っ返されたんだな、」
「・・・おだまり、」
今自分が於かれている状況を直ぐ様看破され、悔しさに歯噛みしながらぎろりと一瞥するが、思わず出してしまった大声にマスターからお静かにと諭され、慌てて口を手で押さえる。元凶の彼は可笑しそうにくくくく、とカウンターに片肘をついた方の手で半面を覆いながら密やかに笑った。
相変わらず憎たらしい人、と今度は叱られないよう声を確りと潜めて反論する。
「そもそも貴方にだけはサボタージュはどうこう、だなんてお説教を受ける謂れなんてないわ。いつもいつもライドウくんをいいように働かせているくせに、」
「はっはっは、怖い怖い。――でもま、俺の助手だからねあいつは。君のところでも小僧を使って情報を集めている連中なんて、珍しくないだろう」
そう切り返されてぐっと詰まる。
其れは確かに事実であった。自分のように自ら駆け回って情報を集め、取材を申し込んでいくやり方ははっきり言って珍しい。ベテランの先輩記者達は多くの小僧を使って様々な方面からの情報を手に入れ、記事を書く。しかし其れはあくまでも【小僧】であって、就学している者をこき使う訳ではない。賃金を支払い、その見返りとして働いてもらうのだ。其れが彼らの労働に見合ったものであるかどうかについては自分の関わるべきところではないが、それでもそれなりの雇用関係が成り立って

いる。だが其れに比べて彼の経営する探偵社ときたら。
「――――貴方、ライドウくんにお給金支払っていないらしいじゃない」
じと目で見遣りながら指摘するが、彼はちっとも悪びれる様子を見せずに言い放った。
「いいんだよ、あいつと俺はちょっと特殊な雇用関係だから」
「あら都合の宜しいこと。何なの、特殊って、」
さらりと流す彼にそうはさせまいと突っ込んでやるが、しかし。
「‥‥それは秘密です」
彼は悪戯っぽく微笑みながら人差し指を口の前に持って来、軽くウインクして躱した。
普段は椅子にふんぞり返っている姿やだらしなくデスクに伸びている姿しか目にしていない所為で失念しがちだが、こうしてカウンターの前に立つ彼を見ていると、背も高く、手足の長い日本人離れした体格をしていることを確認させられる。また、まるでキネマに出てくる洋画俳優のような仕草も相俟って不覚にも頬が赤らんでしまった。そういえば、助手の少年ほどではないにせよ、彼自身の顔立ちだって充分整っている部類に入るのだ。
ぷいと顔を背け、落ち着け中身はあのぐうたら探偵だと己に言い聞かせて心を落ち着かせる。こんな道楽者にときめいたとあっては、帝都新報記者朝倉葵鳥の名折れだ。
そうやって自分が密かに葛藤している姿を見て、彼は再び静かに笑ったようであるが、直ぐ様マスターへと顔を向け、アイスコーヒーを注文した。
昼夜を問わず自分の好むように行動する道楽者の彼の注文にしては、アルコホルが含まれていない

メニュウであったことに意外性を覚え、目を丸くして振り返る。
「どうなすったの、探偵さん。貴方具合でも悪いの、」
「なんだい、藪から棒に」
「だって貴方がミルクホールまで来て、態々そんなものを注文するなんて・・・・。明日は霰でも降るのかしら」
てっきりハイボールでも頼むのかと思っていたのに。
首を傾げながら呟く自分へ向かって彼は口をへの字に曲げてぼやいてみせた。
「おいおい、ひどい言い草だな。・・・・俺だって偶には此処のアイスコーヒーが飲みたくなる時があるんだけど、」
「探偵社でライドウくんにいつも美味しい珈琲を淹れて貰ってる貴方がそんな事を言っても、信憑性に著しく欠けるわね」
彼には勿体無いと常々思っている、年齢にしてはひどく落ち着いていて、そりゃ多少鈍いところもあるけれど、それでもお釣りが来るほどに紳士な少年。彼の珈琲を淹れる腕前は素晴らしく、今では此の探偵にも勝るとも劣らぬものを淹れてみせる程の上達振りだ。あれに味を占めてからは其処らのホールや喫茶店で出されるものでは満足できなくなり、しばしば入り浸っては目の前にいる彼と軽く一戦交え、途中で優しい少年が苦笑しながら席を立つ、という構図が、自分が彼処を訪ねた時の当たり前の光景となって久しかった。
「———ま、此処は此処でうちとは違うブレンドだから。気に入ってるんだ」

「ありがとうございます」
賛辞を与えられた形になったマスターは控えめな笑みを浮かべて注文の品を差し出し、ストローを添えた後は小さく会釈をして音も無く他の客の元へと移動した。
彼の返答に感じた胡散臭さを隠そうともせず、彼がストローを咥えアイスコーヒーを口に含んだのを見計らって問い返す。
「ライドウくんと喧嘩でもなすったの探偵さん。駄目よ、貴方そんなでも大人なんだからちゃんとしてあげなきゃ」
ぐふ、と奇妙な音を立てた後、危なかった、と呟いて懐から取り出したハンカチーフで口元を拭う彼の姿を見て少々の小気味よさを感じた。しかしどうやら気管には入らなかったようで、それだけが実に残念だった。
「あのね、タヱちゃん。なんだってそんな突飛なことを、」
「あら、だって此処暫くライドウくんの姿を見かけないんですもの」
ぐうたらし過ぎて愛想尽かされて、遂に家出でもされたんじゃなくって。
そう言って笑いながら曹達水を口に含み、だけどあの子ならそんなことをする可能性なんて皆無なのかもしれないな、とも同時に思った。
幾度かこのミルクホールで出くわすことがあったが、其の都度、怠け者の所長にこき使われていることをぼやきながら、それでも嬉しそうに笑っていた少年ならば。
だがそんな自分の戯言は彼の内面に思わぬ波紋を投げかけたらしく、何時もなら即座に返ってくる

筈のそりゃないよタヱちゃん、といった言葉が返ってこなかった。訝しんで彼の方を見遣ると、彼は苦笑したままストローを咥えていた。
「‥‥あらいやだ、図星、」
カラン、と氷がグラスの中で音を立てた。
「ううん、いや、図星っていうか、ちょっとね。仕事の関係で今あいつ探偵社にいないんだ、」
「‥‥それって大丈夫なの、」
彼らの仕事内容が、決して表立って口に出来るような類のものだけではないことは察している。自分も幾度か頼みにしたこともあるのだ、無論あの少年の見かけによらない腕っ節の強さと判断力は承知の上だし、尚且つ信頼もおいているが、それでも不安を感じた。
「嗚呼、勿論。あいつは大丈夫だ。そのうちひょっこり戻って来るよ」
「何時もみたいに、」
「そ、何時もみたいにもみあげ尖がらせて」
おどけて答える其の科白に安堵を覚え、ふふ、そうねと微笑みながら答えた。
珍しく穏やかで優しい彼の様子を眺めながら、何時もこんな風にしてくれていたら、私だって素直になれるのに、と漠然とした想いを抱えつつ曹達水を飲んでいると、彼はそういえば、と口を開いた。
「何かしら、」
「――未だあの件を追っているのかい、赤マント、」
「ええ、勿論。だって目撃情報が山のようにわいて出てきたんだもの、真相を解明しなきゃ葵鳥の

名が廃るわ。そもそも、あたしが目指しているのは、」
「巷で噂される怪異や怪奇現象を民俗学的にまとめあげること、か」
「そうよ、分かってるじゃない、」
間を置かず言い当てられたことに嬉しさを感じる。今日は一体どうしたんだろう。いつもいつもしつこいくらいに自分を揶揄っては小競り合いを楽しんでいる彼であるのに。
機嫌良く曹達水をかき混ぜ、しゅわしゅわと泡立つそれを眺めながら傍らを見上げると、彼はそんな自分を少しだけ笑みを浮かべて見詰め、だが引き際を見違えてはいけないよ、と呟いた。
「世の中には、本当に酷いことや危ないことが山のようにあるんだから」
「・・・あ、貴方に言われなくても知ってるわよ。去年、板橋で起こったあの事件だって私も取材に駆り出されたんだから」
「板橋・・・、嗚呼あれか。いや、あんなものかわいい方さ」
帝都を震撼させた、犯罪至上類を見ないほどの惨い事件を【あんなもの】呼ばわりとは。いかな彼の戯言といえど勘弁してやる訳にはいかない、と隣に立つ彼を睨むが、しかし直ぐに言うべき言葉を失った。
今目の前で生真面目な表情を浮かべている彼の姿と、これまで見知っていた彼の姿との差に、激しく違和感を覚えた。
これは、本当にあの、おちゃらけた、自分を一向にきちんとした名前で呼んでくれない、何時訪ねてみても椅子に座ってだらけているだけの鳴海探偵その人だろうか。

黙り込んだ自分を一顧だにせず、彼は虚空を見据え口を開いた。
「世の中というのは、君がこれまでに見聞きしたり経験したりしたものなんて比べ物にならないほど、汚く、惨たらしい事が平然と行われている。そしてそれは珍しいことでもなんでもないんだよ。此のご時勢では特にね。ただ、表には出ないだけさ。若し其れに少しでも関わろうものなら、君なんてあっという間に引っ張られて、――其処で終いだ。だから、危険な取材も程々にな。分かったね、葵鳥さん」
反論してやろうと口を開きかけたが、最後に呼ばれた自分の名に驚いて思考が飛んだ。
真っ白になっている自分に目もくれず、言いたいことを言って気が済んだのか。彼は懐から財布を取り出し、紙幣と小銭を取り出した。
「今日は奢るよ」
そう言って曹達水の代金までカウンターに置いたことに更に仰天して我に返る。
「え、え、ちょっと待ってよ、」
「ご馳走様。それじゃあ、」
そう言って身を翻す彼に待ちなさいったら、と呼び止める。
「なんだい、騒がしいなぁ。またマスターに叱られても知らないぜ」
こっちの気も知らず、減らず口を叩き続ける其の口をねじ切ってやりたいと思いながら、何時にない様子が気にかかった。
「‥‥何処行くの、」

「ちょっと其処まで。ライドウが来たら宜しく。‥‥嗚呼、ついでに煉瓦亭にでも足を伸ばしてハヤシライスでも食ってくるかな」
「何言ってるのよ、もう、ちゃんと答えてよちょっと、探偵さん、」
「じゃあね、――本当に、危ない事には首を突っ込むんじゃないよ」
特に今は。
そう言って彼はこちらに口を挟む隙を与えず、僅かに開けた扉の隙間からするりとすり抜け、立ち去った。慌てて扉を開けるも如何なる術を使ったものか、前の通りからは目立つ筈の長身の後姿は欠片も見出せず。はしたなくも地団駄を踏むより他無かった。

「――ち、此処もか、」
軽く舌打ちし、通りを塞ぐ幾つもの車輛を忌々しげに見詰める小僧に同意する。
「ふぅむ。桜田山でも思ったが、矢張りあちらとこちらでは異なっておるようだな」
「――構いやしないさ、」
「む、」
「たとえ何が出てこようとも、何に遮られようとも。――俺は前へ進むだけだ」
頭上を見上げ様子を窺えば、小僧は眉一筋も動かすことなく言い放った。帝都へ出て来るまで度々耳にしていた科白とは同一でありながら、確実に異なる響きを持つ其れに成長の証が見て取れるようで、僅かに目を細める。これはいい後継になりそうだと胸中に喜びが沸き立つが、しかし調子に乗っ

てもらっては困るので面には露ほども表さない。
「ふん、格好をつけるのも結構だが、揚げ足を取られぬよう気をつけろ」
目付け役の憎まれ口は何時ものこと、と少年は聞き流し、無論だと答えた。踵を返し、道を開くべく新たに召喚した鎧姿の若武者を従えながら、異なる経路の捜索に向かう。黒い後姿に遅れぬよう後をついて走りながら、心の片隅で考えるのはもう一人の、ややもすれば目の前のひよっこよりも手のかかる男のこと。
金王屋の前で見せた、これまでなら決して面に出すことなど無かったであろう、あの鋭い顔つき。溢れんばかりの才覚を有しながらも人生経験の浅い小僧には、其れが何を示すのかが看破できず、ただ不安をかきたてられただけであったようだが、伊達に長く生きているわけではない自分には一目で判った。
あれはこの世の闇というものを良く知る者特有の目だ。
其れは自分たちの領域である、人外のモノたちや其れを操る一部の人間たちが跋扈する闇ではなく、特別な力など何一つ持たない人々の心の澱によって形作られる闇。時代を問わず、そういったものに親しく接している人間たちは皆、あのような目をしていた。
恐らく保護対象たる我々が居るからであろう、あの時は未だ妙な行動をとっていないようであったから良かったものの、今は果たしてどうしているやら。出会った当初の小僧とは異なった意味で、彼は時折世の全てに対して希薄な目を向けることがあった。たかが三十と数年しか生きていない癖に一丁前に、と思わないでもないが、其れでも見捨ててしまうには、情が移っていた。

もひとつおまけに、小僧はあの子供にすっかり参ってしまっている。時折忌々しいほどに可愛げのなくなる弟子ではあるが、すっぱり振られるなら兎も角。下手な終わり方を強いられ、心に傷が残るようなことだけは避けてやりたかった。

これ程までに自分が心砕いてやっているのだ、くれぐれも軽はずみな行動だけはとってくれるなよ、と脳裏に浮かぶ長身の影に向かって呼びかけながら先を急いだ。

ペンを置いた。

ざっと読み返し、頷く。

愛想代わりに水仙のひとつでも添えてやろうかと思ったが、其れはあまりにも悪趣味が過ぎるだろう。そう考えたところで、これを目にした時の少年の剣幕ぶりがあまりにも容易く想像できてしまい、思わず笑みがこぼれた。

そしてこの期に及んで笑うことの出来る己に酷く驚く。

かつての自分であれば想像もできなかったであろう、此の感情の動き。

これもあの少年がもたらしたものなのだろうか。

見慣れた室内を見上げ、頷く。

嗚呼、屹度そうなのだろう。

目線を下げ、今となってはすっかり馴染んだ探偵社の社内をぐるりと見渡す。

中央に配置された卓子に椅子。黒猫と二人でよく転寝をしては少年に叱られたソファー。レコード

と蓄音機。興味の赴くまま、雑多に収集した書物。ラヂオ。報告する少年を前にして打ち続けたタイプライター。そして、全ての始まりを告げた、電話。
目に焼き付けるように暫し見入り、目を伏せ、再び決意を固める。
ならば尚更、自らの過去の穢れを彼に背負わせる訳にはいかない。たとえ此の命に代えることとなろうとも。
――――否、
首を振って否定した。
寧ろ自分如きの命ひとつでまかなえるものならば安かろう。
つい、と文面に指を走らせ、万が一にも飛ばされて紛失することが無い様、七色に煌く文鎮でデスクの上に留め置く。あの子なら、必ず生きて帰りこれを目にするだろう。
願う心とは裏腹に、既に手遅れかもしれないぞと頭の片隅で囁き続ける理性の声を、力ずくでねじ伏せる。
くれぐれも暴走してくれるなよライドウちゃん。いい子にしてお兄さんの帰りを待っててくれ。
『鳴海探偵社』と洒落た文字を嵌め込んだ扉の取っ手に手を掛け、懐に忍ばせた愛銃に上着越しに触れながら扉を開いた。
「・・・あと、二枚」
最後の角柱を手に入れる為に此処異界晴海で出された試練は、力を示すことであった。洛油の御札

とやらを集めて来いと言われ、こうして周辺一帯を駆け巡り。象の姿をした、恐らくは印度出身であろうかと思われる悪魔ショウテンを只ひたすらに駆り続けた。その甲斐あってか今手にするは七枚。あと一息といったところだが、奴らの弱点である呪殺効果の秘められた弾丸の所持数がどうにも心許無くなってきた。このまま一気に推し進めたいのは山々だが、物資補給のため此処は一旦退くべきだろう。

足を止めた自分を無言で見上げる黒猫にそのように伝えると、うむと頷いた。

「漸く何時ものお前に戻ってきたようで何よりだ。‥‥先程から景気良く撃ちまくっていたしな、俺も気にはなっていたところだ。では一旦戻るぞ」

唯一反応する時空の歪みへ駆けて行く黒猫の後を追う自分に、目付けは更に言い募る。

「矢張り他から言われるより、自分に指摘される方が身に染みるか、」

笑みを含ませて揶揄された科白に不快感を覚えた。

「‥‥俺とあいつは同一ではない。一緒にするな。俺は、顔に傷を残すような無様な真似はしない」

主張する自分をちろりと眺めた黒猫は何を思ったか、人の悪い笑みを浮かべ言い放った。

「そうだな、あの男が激しく嫌がるだろうしな」

思わぬところでかつての大騒動をあげつらわれ、赤面する。

以前、何よりも真摯な顔で示された彼の人の教えを守り、負傷した際は何よりも先ず治療を心がけてはいたが、節約も兼ねて少々の掠り傷であれば業魔殿へは寄らず社内で治療を済ませることも半ば日常となっていた。何時もの如く傷薬一つで済む程度の傷をこさえ、椅子に腰掛けながら新聞を読み

耽っていた彼の人に帰社の挨拶を口にし治療のための時間を請えば、ああともううともつかぬ返事を口にした彼はこちらへ目を向けるなり素っ頓狂な悲鳴を上げ。すわ何事かと思ってみれば、問題は傷の大小ではなくこさえた箇所の問題であったという訳だ。自分でやると幾度も主張したが、なんだかんだと言い合った挙句結局は治療道具を奪い取られ。お前の一番の長所なんだからと何やら酷い言葉を投げかけられながら、勝利者たる彼の人が手ずから手当てをしている間、頬や顎に添えられた彼の手の平の熱と間近に迫った面を前に、目のやり場と手の置き場にひたすら困ったものだった。其の間中黒猫が何をしていたかというと、少年の弁護をする訳でもなく、はたまた男の味方をするでもなく。我関せずと悠々と所長用デスクに寝そべりながら面白そうに目を細め、ぶちぶちと文句を言い続ける男と、意中の相手に息がかかるほどの傍近くまで擦り寄られ、此れ幸いと口説くでもなく、ただただ赤面するしか能の無い無様な少年の姿を、高みの見物と決め込んでいただけであった。

「・・・別にそれだけが理由じゃ、」

慌てて弁解する少年を他所に、黒猫はしれっとした顔で躱した。

「判っているさ、揶揄っただけだ。ほれ、足が止まっているぞ」

相手の思惑にまんまと嵌ってしまった羞恥で耳を赤く染め、くそ後で覚えてろよ、と不穏な科白を吐き出し駆け寄る弟子の姿に、黒猫は自らの近い未来において多少の不安を感じたが、それでも気分の向上した様子に少なからず安堵の念を抱いた。

いやしかし小僧どもの仲の悪さは近親憎悪という奴なのだろうかと、此処最近覚え始めた新しい言葉を当てはめ、嗚呼そうなのかもしれないなと一人納得しながら、先んじて時空の歪みへと其の小さ

な獣の身を投じた。

「――――よォ、」

昔馴染みの声が耳朶を打ち、ふいと振り返れば其処には矢張り見慣れた男が居た。軽く手を上げ、へらへらと笑いながら歩み寄ってくるその姿と、先程かけられた陽気な声。自分に向けられるにはひどく場違いな程のそれらは此の男にのみ許された無礼であるが故、持ち場に居た舎弟たちは嗚呼またかと言わんばかりの態度でこちらの指示を待たずに無言で姿を消していった。

男の姿が近づくにつれ、訝しむ。

一見すれば何時も通りの、吹けば飛ぶ程にお軽い鳴海探偵その人だろう。しかし他の誰が騙せたって此の自分だけは騙せると思われてはかなわない。何があった。

振り向いたまま無言で凝視する自分に、男はその笑みを困った風に変えながら、まぁ立ち話もなんだし座ろうぜと続けた。

「あんたと向かい合って立ち話するのは何か落ち着かないんだ。見下ろされるのに慣れてないから」

「ふん、よう言うわ」

「その辺の縁台でいいからさ、‥‥座らないか」

自分の煙草盆が置いてある縁台を顎で指し示し、誘う男にこれといって逆らう必要性も感じず並んで腰掛けると、男はふぅ、と疲れたような溜息を吐いた。

何処かしら空虚さを伴う、見かけだけの明るさ。――― 厭な、感じだ。

「‥‥どないしたんや」
「‥‥」
「呑みに誘うには、えらい湿ったれたツラやな鳴海ィ」
だんまりであった。
だが其の沈黙は都合が悪くなった折に何時も見せる子供のような貧れではなかった。
「‥‥そもそも、葛葉はどないし、」
「健三さん、」
早々に焦れて札を切った自分の発言を遮るように呼ばれ、目線を向ければ帽子を取った男がそ知らぬ顔で傍らの煙草盆を引き寄せごそごそといじっている。
「‥‥何してんねん、」
「見りゃ判るだろ、」
煙草仕込んでンだよ、出来るまでいい子で待ってな。
袋から煙管を取り出し、紋の描かれた煙草入れの蓋を開けながら戯言を飛ばしてきた。
「ぬかせ」
さり気無く問い掛けを躱され、舌打ちをしながらの己が返答に男は笑い、先に葉を詰め、火種を仕込み始めた。その様子を眺め、紙煙草を好むこの男がこんな風に吸るのを見るのが実に久方振りであることに気が付く。場違いとは十二分に理解していながらも不思議な懐かしさに感じ入った。つい先日羅宇屋に預けたばかりの煙管は通りが良く、思っていたよりも早く点いたようで。男はひと吸いぷ

かりとやった後満足そうに頷き、そのまま吸い口を差し出した。
ささやかに濡れた吸い口と男の笑顔を交互に見遣り、少々の間を空けた後差し出されるがままそれを咥え、すぅと吸い込むと、男は声も立てず、嬉しそうに笑った。
「ちょいとばかし、留守にすることになってさ」
ふぅ、と自分が吐き出した煙の行く先を見詣めながら男が独白する。
「その前に、一通りの挨拶回りをしてるってだけだよ」
「・・・お前がそんなに義理堅い人間やったとは驚きやな、」
「はは、ひどいな。――でも実際、俺にも良く判んねぇんだよな実は」
「・・・葛葉はどないした、」
「・・・・」
「・・・おい、」
「屹度帰って来るよ。だからその時は宜しく」
「宜しくて何がや。勝手なことばかり一方的に言いよってからに。そういういらんところは相変わらずか」
其れでも拒否ではない回答を得た男はふふ、と笑い。ゆるく首を振り再び溜息をついた後、目を伏せながらゆっくりと頭をもたせ掛けてきた。振り払うでもなく其の重さを受け入れる。
どうあっても退く気などさらさらないことを、其の柔らかな拒絶で悟らされた。
折角拾った命をふいにする気か。この阿呆は。

腕を懐から引き出し、身を預ける男の肩をゆったりと包みこむように抱き。男が拵えた煙管を吹かしぷかり、ぷかりと煙を吐き出しながら明後日の方向へ顔を逸らし続ける。接した左の脇腹に、固い感触。その、かつてであれば馴染んだ、しかし今となっては用いることもそうは無かろうと思っていた感触に、自分が気付かぬ筈はないということは承知の上で、此の位置をとったのだと知らしめられた。

「そうだ、佐竹」

明るい口調で男が何かを思いついたように口走った。どうせろくでもないことだろうと思いながら受ける。

「・・・・なんや、」

ちょっと急ぎだから、挨拶が済んだら直ぐにでも発とうと思ってたンだけど。

「それじゃあまりにも素っ気無さ過ぎるよな」

俺とお前の仲で。

不穏な話の運びに眉を顰める。

「・・・・何が言いたいねん」

いや、だからさ。今じゃすっかり臺が立っちまったかも知れないけど。

にやにやと人の悪い笑みを浮かべながら男は続けた。

「無かった事にしたあれ、もっかい試してみるか、」

瞬間、頭が煮えた。

「――――っ、何言うとんねんこのど阿呆が、」
肩から手を外し男の頭をばしっとはたく。無論加減はした上でだ。
いてー、そんなに怒ることないじゃん。お前ってばほんっと手が早いんだから、と痛そうにさすりながら男は涙目でぼやき。仕掛けられた自分はと言えば、此の男ときたらホンマどうしようもないろくでなしやと憤りを感じた。
行為自体はどうあれ、そんな形見分けのような理由で誘われるのは真平御免だった。
「エエ加減にさらせ、お前にとっちゃ冗談で済んでも、巻き込まれるわしにはどエラい迷惑や。葛葉に知られたら殺されるわ」
「殺されるって何でだよ。というかお前相手じゃいくらライドウだって其れは無理、」
「女だけやのうて、男の恪気かて時と場合によっちゃア凄まじいもんがあるいうンは、わしよりお前のがよう知っとるやろうが」
「え、一寸待ってよ、・・・お前、何処まで勘付いてるわけ、」
「逆に訊くがな。お前わしのこと誰やと思とんねん、この阿呆が」
自分の回答を耳にした途端、気まずそうに目を逸らし、半面を片手で覆いながら、あーもー、なんだよライドウちゃんてばお子様なんだからなー、と天を仰いで嘆く姿を未だ苛立ちの収まらないまま眺める。そうやって暫くもごもごと何事かを口中で呟いた後、男は再び甘ったれた仕草で半身を預けてきた。肚の底で跳ねそうになる苛立ちと焦燥の虫を押さえ込み、後は男の気が済むまで好きなようにと、ただ其れだけを念じた。

所詮、自分にしてやれることは、――此の男が自分に望んでいることは所詮、そういうことなのだ。
「――――平気だよ」
安心しきった面持ちで自分に身を委ねたまま、男は心地良さそうに目を伏せ、ぽつりと言葉を漏らした。
「‥‥何がや、」
「あれはよくある、思春期の、‥‥若さ故の過ちってやつだから」
若しくは刷り込みってやつかもなぁ、と幾分ぼんやりとした口調で続ける。
「本気で受け取ることなんて、ねェンだよ。‥‥あいつは、子供だ」
それにこの先、どんどん世界が広がって。其処でいろんな人と出会える訳だし。自分の倍近く年をくっちまってる明治生まれの身勝手な男のことなんか直ぐに忘れちゃうって。
自らに言い聞かせるように締め括られた。
子供、子供、か。
言った内容自体はおかしくないものの、本当にそう思っているのか。其の真偽は発せられた時の表情や口調といったものに如実に現れていた。其れを指摘するのも容易いが、しかし人にどうこう言われたからといって自らの認識を改めるような殊勝さがあるとも思えないし、他人を騙すことと同様、自身ですら巧く騙せてしまうのが此の男だ。言うべき言葉など見つかろう筈も無く、ただ沈黙するより他無かった。
こちらの遣る瀬無い思いに満ちた胸中など気にもかけずに、思うがまま口にして気が済んだのか。

男は上体を預け、何かを確かめるかのように自らの肩を抱く自分の手に触れたり、肩口に頬を摺り寄せたりしながら微睡んだ。
そして突然笑みを零した。顔を向けるが、男は穏やかな笑みを浮かべたまま目を伏せていたため、目線が交じり合うことはなかった。
ふわふわした、色素の薄い髪の毛がそよ風になびく。
時折、寄せられた男の髪に鼻筋を埋め、その匂いを嗅いだ。犬かよお前は、と今度は声を上げて笑いながらじゃれてくる手を握り、抱えた頭の頂きに唇を落した。
「‥‥不味いな、」
くすん、と鼻を鳴らし男が目を見開いた。
「‥‥あぁ、何がや、」
「此処に居ると、どうも際限なくお前に甘えちまうみたいだから」
もう行くわ。
己が肩にかかっていた自分の手をを引き剥がし、傍らに置いた帽子を手に取ると、よっと掛け声をかけながら男は縁台から腰を上げた。
かけてやるべき言葉が思い浮かばないまま、出会った当初から変わらない細っこい後ろ姿を見詰める。そんな己が心の動きを一体何処まで読んでいるのか。はたまた全てを承知の上か。
くるりとこちらを振り返って向けられた其の眼差し。
そんなものを見せられてまで、下らぬ感傷に満ちた言葉などかけられる程青くもない。

男は再びへらりと何時ものように笑う。
「あれ、厭だな。何そんな顔してンだよ佐竹。別に死ににに行く訳じゃないンだぜ」
前へ進むために頑張ってくるんだ。何時もみたいに減らず口で送り出してくれよ。
「‥‥阿呆が」
忌々しそうに舌打ちしながら口にした返答に、男はくしゃりと泣き笑いのような貌を見せた。煙管を奪い取り煙草入れに置くと、子供のように無心な仕草でぎゅうと抱きついた。
そうして数分過ぎた後、両腕を解き、男は何時もはだらしなく猫背気味に曲げている背を真っ直ぐ伸ばし。
「貴君の諸々の御協力に、感謝する」
右手で帽子を胸の位置に整え、軽く腰を折り、真摯な顔つきでそう口にした。
そして其れをそのまま頭に持っていき、顔を隠すようにして、じゃあな、と軽く手を上げ歩み去った。

「――――では、これより直ちに丑込め返り橋へと向かい、二度と迷えぬよう貴様を元の世界に叩き返してくれる。着いて来い」
「ご親切にどうも」
度重なる不遜な物言いにも流石に慣れた。
大して苛立たしさも感じず肩を竦めて躱してやると、雷呈は、彼にしては珍しく‥‥、と言っても

左程詳しく知っている訳ではないが――何やら言いた気な表情を浮かべた。
「――何だ、」
「‥‥」
むっつりと黙ったまま背を翻され。目付けを従えて社の鳥居を抜けて行く僅かに裾の綻んだ黒マントの後に続いて、自分もまた歩を進めた。
「何か言いたいことがあるのなら、はっきり言ったらどうだ。何か疚しいことでも思いついたか、」
一向に口を割ろうとしない相手にそう揶揄してやれば、誰が、と思いの外激しい口調で反駁された。
「‥‥此の我を貴様如きと一緒にするな、」
「おお怖い。――ならば先ほど俺を見て何を思ったのか、正直に言ったらどうだ」
彼の怒りをさらりと流し。長く続く石段の上に立ち止まったまま問い詰めると、彼は小さく舌打ちをした。顔に残る傷跡の所為で自分よりも表情豊かに見えるその面を眺め、いざ帰る此の段になって漸く物珍しさと共に、彼が確実に自らと異なる存在なのだという事実と、本来であれば存在すら知ることのなかったであろう彼とこうして会い見えたということに対する感慨が自分の中にしみじみと湧き起こった。
一方の彼はというと、咄嗟に感情を荒げてしまったことを恥じたのか、ふいと其の顔を背け。足を再び動かしながらゆるりと口を開いた。
「――先ほど見せた貴様の所作、」
「‥‥うん、」

自らもまた歩調を合わせゆっくりと階段を下っていく。
「我の言葉をあっさり流し、肩を竦める其の一連の所作が、‥‥あいつと良く似ていた」
「あいつって、――鳴海さんか、」
「其れ以外に、あんな戯けた振る舞いを我らに見せる人間が居ると思うか、」
うんざりとした口調で当たり前のことを訊くなとばかりに続けられた返答に思わず噴出する。
「ははは‥‥、嗚呼確かにな。しかし――そんなに似ていたか、」
「気付いて居らなんだか。随分と呑気だな十四代目ともあろう者が」
全く意識していなかったことを指摘され、苦笑が漏れる。参ったなと思い足下の黒猫へ視線を投げかけるが、ナァと同意を示されて仕舞った。
「言い訳の仕様もないな。‥‥けどまぁ、不快ではないよ。あの人の所作が俺にうつるということは即ち、其れだけの長い時を、俺はあの人と共に在るということなのだから」
本心であった。しかし平然とそう言えば前方を歩く彼が呆れた声を発した。
「我の影法師はとんだ色惚けらしいな。これは一刻も早く元の世界へ引き取ってもらわねばどんな影響をもたらされるか分かったものではない」
至極迷惑そうな物言いだが、其処は其れ。異なる時空に存在するとはいえ彼もまた自らと同じくする部分を色濃く持った存在である訳だから、彼がそうであったように自分にもまた、彼の声色に僅かに潜んだ感情にも気付けるというもので。
――まさか最後の最後になって、こうも絶妙な反撃の機会が訪れてこようとは。

人の悪い笑みが口元に浮かぶ。
此処に紛れ込んで此の方、事ある毎に自らの内面の動きを看破或いは揶揄され続け、業腹であったところだ。業斗童子には悪いが多少見逃してもらおう。
「――羨ましいか、」
ならば最初からそう言え。
「何、‥‥何故此の我が、貴様如きに羨望の念を抱かねばならんのだ、」
むっとした口調で問うて来る彼に言い放つ。
「君は未だそれ程あの人の色に染まれて居ないようだから」
中々にいい気分がするものだぞ。
「君だって所作がうつってしまうほど、あの人の傍に居たいだろうに。‥‥気の毒なことだ」
「何故此の我があやつ如きに懸想していると、」
最早腹立たしさを隠そうともせず、幾分足早に駆け下りながら息も乱さずそう続ける彼に遅れじと続きながら言葉を返す。
「何故かって、そんなの簡単さ」
君は未だ知らないのかもしれないけど、幾らあの人が常連だからといって。
「こんなに連日連夜の居続けを許すほど、彼処の女将さんは甘い女性じゃない」
特に、被保護対象たる君が未だ帝都の事情に詳しくない未成年であることくらいあの人はちゃんと弁えているだろうからね。

「余程のことがない限り、連絡手段すら与えずに家を、――探偵社を空けたりはしない筈だ」
「分からんぞ。確かに貴様のところのあいつはそのような人物かもしれんが、こっちのあいつときたら、」
「嗚呼其れは無い。其れは無いよ雷堂」
皆まで言わせず彼の科白をあっさりと退けてやると、彼は不快気に何故だと反駁した。
「貴様はあいつと顔を合わせた訳ではなかろうが」
「確かにそうだ。だがね、雷堂。‥‥そういう人でないと、君はそうそう心を許したりはしない筈だ」
違うかい、隠しても無駄だよ。だって君は俺でもあるのだから。
急ぎ足で駆け下りた為か、境内へと続く長い長い石段は何時しか途切れ。辺り一帯田畑風景が広がる道に出たところで前方を進む彼が漸く足を緩めた。疲れたのだろうかと思い眺めるも、一向に息を切らせていない其の様子から、嗚呼そうだ彼は確かに自らと基を同じくする者だと改めて感じ入った。
「そして君は。‥‥幾らでも彼と連絡を取る手段を持っておきながら、其れを決して使おうとしなかった」
「‥‥我と存在を同じくするモノを無闇矢鱈と他者に接触させるのは、危険だからだ」
頑なに前方を見据える彼の横へ並び。二人揃って駅方向へ向かい静かに歩を進める。
「あの人もヤタガラスの関係者だよ雷堂。許容範囲内さ」
何も返してこない彼に向かって密やかに続けた。

「――君は、俺に、君のあの人を会わせるどころか、見せることすら厭うていた」
ざくざく、と足下の革靴が砂利を踏む。
「だから、取れる筈の連絡をあの人に取らず。留守居のまま、社を閉じるに任せた」
其れが最も、あの人に会いたがった俺を納得させる理由になるからな。
「――あの甲斐性なしが家賃を払わんからだ」
ビルヂングの前で頭から湯気を出しながら、スカート姿で仁王立ちしていた大家の顔が浮かび、くすりと笑ってしまった。しかし再び彼の言い訳を退ける。
「確かにあの人はそういったことに左程関心のない人だけれど。‥‥君が締め出しを食らっているというのに素知らぬ顔を決め込む程薄情な人でもないよ」
良いから。いい加減正直になれよ。
「何を恥じることがある。俺は君だよ、雷冥。‥‥しかももうじき元の世界へ帰る身だ。何を言ったところで構いやしないだろう」
そろそろ駅に着く頃合いだしね。
いかな強情な彼を呆れ気味に見遣ると、其れまで無言のまま遣り取りを聞いていた業斗童子が可笑しそうにニャオ、と笑い声を上げるのが聞こえた。
「あちらの小僧の言う通りだな。‥‥潔く白状してはどうだ、夏輝。どうせここに居る全員には、疾うにばれてしまっている事だし」
「業斗まで我にそのような、――ええい、致し方あるまい」

頼みの綱の業斗童子にまで見捨てられ、四面楚歌に漸く覚悟を決めたのか。足を止め腕を組み、ぎろりと不機嫌そうな眼差しを隠そうともしないまま彼は言い放った。
「嗚呼そうとも。我は確かにあいつに懸想しているし、貴様とあいつの接触を我に出来る範囲で阻ませてもらった」
だが其れの何が悪い。
平然と居直り、彼はこちらを見据えた。
「貴様とて、我と同じ立場になれば。‥‥異なる時空の十四代目が貴様のあいつに会いたがったとしたら、其れを容易く叶えてやろうとするのか、」
「まさか」
しれっとした表情で一蹴し、軽く肩を竦め、人の悪い笑みを浮かべ言い放った。
「君と同じく。俺に出来る範囲で最大限、接触を阻ませていただくさ」
何せ相手は俺と同じ【ライドウ】だ。僅かな油断が命取りとなることくらい、容易く想像できるからね。容赦はしないよ。
ざああ、と二人と二匹の周辺を一陣の風が通り抜ける。
そうして暫く互いに見合った後、二人同時に全く同じ笑みを口元に浮かべ。顔に傷跡の残る方は踵を返し、無い方は無言で彼の後に続いた。
「‥‥さっさと帰れ、影法師が」
「言われずとも帰るさ。‥‥あの人に会いたくって堪らない。失敗してくれるなよ、雷堂。もう限

界なんだ」
「余裕の無い貴様と一緒にするな。心配せずとも熨斗付けて返してやる」
「ははは…、お手柔らかに頼むよ」
そうして互いに奇妙な連帯感を抱きながら電車に乗り。筑土の街を目指した。

さっさと行っちまえ。
息と気配を完全に押し殺し、大きな貨物の影に隠れて見張りをやり過ごす。
一体何が入っているのやら――恐らくも何もどうせ碌でも無いものが沢山詰まっているに決まっているが――、此処地下造船所内に於いては様々な貨物が配置されており、身を隠す場所には苦労しなかったことが幸いと言えば幸いであった。
それにしても呆れ返るは此の国の政治家どもと海軍連中だろう。なんだってこんな大掛かりな施設が建造されているのに気付けなかったのか。一度潜入を果たしている少年の言を疑っていた訳ではないが、此処まで本格的なものとは正直思っていなかった。これほどの施設を完成させようと思えば、かかる費用も手間も莫大であることは間違いない。ボンボン育ちの政治家どもは百歩譲って仕方が無いとしても、自らの領域である海中に手を伸ばされておきながら、海軍の連中は何をしてやがったのか。そもそも、廃棄予定の艦が掠め取られたのにも気付けなかったこと自体、話にもならないお粗末さだ。
だから河童呼ばわりされるンだよ。もう一度予備からやり直したらどうだ。

何が『言行に恥づるなかりしか』だ、と思い浮かぶ幾つかの顔に向け、内心罵倒を浴びせかけながら用心深く周囲の気配を探る。

此の施設内では息をする者自体がどうやら希少であるらしく、見張りは全て呪法を用いて蘇らせた死人による憲兵たちばかりで。もひとつおまけに見るからに性質の悪そうな悪魔たちが我が物顔で辺りを闊歩していた。後者にはただ目を合わぬよう気をつけていれば己に興味も寄越さずに立ち去ってくれるが、問題は前者だった。

女だてらに帝都新報の記者を務めている女性が強引に依頼してきた赤マント捜索の一件の折、足を伸ばした深川で実際に相対した少年によってもたらされた報告は元より、様々な方面から手にした情報に拠れば、矢張り彼らは対人用に造られたモノたちであるらしく。また其れ故、人の気配に特に敏感に反応を返してくるとのことであった。

しかし反応するのが気配だけなのか否かが気にかかった。体温は。呼吸は。嗅覚は。考え始めればきりが無い。裏を取ろうにもそんな時間が無かった上、緘口令どころかそもそも具体的な計画の全容を知る人物さえ五指に満たない状況にあっては、それもまた儘ならず。仕方なしに数日前から禁煙し、こうして身を潜め、普段にも増して細心の注意を払いつつ、牛歩の如くちまちま進んでいるという次第だ。

世界を取り巻く科学情勢の中、まさか此の国に於いてそのような技術が実用段階まで進められていたとはついぞ信じられなかったのだが、現に今、こうしてサーベルを腰に佩き機関銃を手にして動き回っている赤い憲兵の姿を目にしてしまえば、其れが現実であることを受け止めざるを得ない。

嗚呼、やっぱ俺もおじさんになっちゃったのかねェ。昔はもうちょっと柔軟だったと思うんだけれども。これが寄る年波ってことなのかなぁ。

遠ざかって行く赤い後姿を確かめながら非常に不愉快且つ物悲しい思いが脳裏を過ぎり、小さく吐息をついた次の瞬間。赤マント姿の憲兵が一体翻り、構えられた機関銃が火を噴いた。思わず息を詰め全身を緊張させる。床やら金属製の柱やらに威勢よく弾丸が当たり跳ね返る音が響き、火薬の臭いが周囲に広がった。

くそ、あの距離で反応しやがるのか。

忌々しく思うが、たとえ一瞬とはいえ気を緩めてしまった自覚はあったので自省するしかない。だが弾道に一貫性が無いところを見ると、どうやらはっきりと発見されたわけではなさそうだった。此処はひたすら辛抱するより他ないだろう。

先程よりも更に息を殺し気配を潜めた。

しかし運悪く最後に放たれた数発の内一筋の弾丸が傍近くの床から跳ね返り、己が左腕の皮膚を抉りながら掠っていった。漏れ出でそうになる呻き声を渾身の力で堪える。灼熱感が一気に広がり、次いでじわりとした痛みが走った。

堪えろ。大した傷じゃない。

一方、何の反応も無かったことで気が済んだのか、周囲に撒き散らした薬莢になど目もくれず。奴は構えを解き踵を返し、機械的な仕草で再び元の道筋へと戻っていった。

完全に靴音が消え失せてしまうまで耳を澄ませ、漸く一息つく。

――嗚呼、失敗っちまった。
未だ彼の人の姿すら垣間見ることもできていないというのに此の体たらく。矢張り現役を引退するということは自分で思っている以上に厳しいことなのかもしれない。
酒と煙草、少しは控えようかなぁ。
油断無く周囲の気配に気を配りながら負傷した箇所を確かめる。少なくない血液が傷口から次から次へと染み出し始めている。また掠ったものがものなだけに、服に隠れた周辺も火傷のような状態になっていることは間違いない。後になれば痛みが増していくだろう。しかし真皮部分や肉にまで到達せずに済んだことは幸いだった。其処までいくと応急処置にも時間がかかるし、何より出血が止まらなかった筈だ。
懐から素早くハンカチーフを取り出し、三角に折ってから細長く折り返し、止血も兼ねて上着の上から動きの邪魔にならない程度にしぼり上げる。いずれは外さねばならぬだろうが、それでも目標に接近するまでの間、負担を和らげるくらいにはなるだろう。
二、三度腕を振って動作を確かめ、小さく頷く。頭を切り替え、次に進むべき道順を思い返し、一歩を踏み出した。

デスクに拳を叩き付ける。
片手で手紙を握り潰した少年は、湧き起こる怒りで身を振るわせ、ぎりりと歯を食い縛り、手紙が置かれていた場所に目を据えた。書き記されていた文章が脳裏を泳ぐ。

――勝手なことを‥‥。
怒りで面を紅潮させたままデスクへ向かって倒していた背を伸ばし。ぐるりと室内を見渡せば、小奇麗に片付けられた社内の様子が目に入り、尚更苛立ちが募った。
何が『帰りを待っててくれ』だ。
見ずとも分かる。キッチンもバスルームも、厠ですら綺麗に掃除されているに違いない。彼の私室は言わずもがな、だ。
あのぐうたらな彼がそのような行為に走ることなど、少なくとも自分が此処に来てから只の一度も無かった。家事全般を全て自分任せにしていた彼が、たかが二週余りの間、室内が荒れることに我慢ならなかったとは考えられない。ならば彼の此の行為が、――『身辺を整理する』という行為が指し示す意味をどう捉えるか。
はぁ、と苛立ちに震える吐息を洩らした。
――考えるまでも無い。
「一人で、‥‥死ぬ気か、――巫山戯るなっ」
中央の卓子に拳を打ちつけ、虚空へ向かって吼えた。未だ身体は瘧のように打ち震え、これまで経験したことも無い程の激情が我が身を襲い続ける。
何でもかんでも人に押し付けて。
そのくせ、自分は何時も何時も高みの見物で。
『頼りにしてるよ』、『お前なら大丈夫だろう』なんて科白を、面と向かって自分に吐いておきなが

ら。
「今更・・・、今更子供扱いしやがって。莫迦にするのもいい加減にしろ。――っこんな、・・・・こんな時にだけ、・・・・大人ぶってんじゃねぇよっ」
壁へ拳を叩き付け。はぁ、と大きな吐息を吐いて肩で呼吸を整えた。
何時になく荒れている自分を遠巻きに見詰めていた黒猫が、忌々しげに舌打ちし。莫迦め、只人のあいつが敵う筈ないのにと呟いた言葉が耳を打つ。
そうとも。彼は、たとえ悪魔を見る能力があろうとも所詮只人に過ぎず。其れらから己が身を悟らせないようにする術には長けていても、相対することなどできよう筈もないのだ。過去、彼と宗像少将との間に一体何があったのか。自分には全く分からないが、其れでも今の宗像少将が自らの身辺に強力な悪魔を付き従えていることは間違いない。何としてでも追い着かなければ、彼は容易く其の命を奪われてしまうだろう。
血に濡れた彼の姿が脳裏に浮かび、ぞっとした。全身が、総毛立った。
「――冗談じゃない」
手紙を塵一つ残っていない空の屑籠に放り込み。無言で思考を巡らせる自分に向かって目付けの黒猫が助言を出す。
「行くぞゴウト」
「ああ。・・・・ついでにあいつの行動範囲にいる人物たちからの情報も押さえていこう」
「勿論だ」

自分が知る範囲に於いての、あの人の知人関係をざっと脳裏に思い浮かべる。
真っ先に思い浮かぶのは過去の彼を知っている口振りからして、誰よりも親しいのであろうと思わせる深川の任侠。銀座に拠点を置く帝都新報に勤める女性記者は、運が良ければ新世界に居る筈だ。そして常連であった料亭竜宮の女将。
「霞台はどうする、」
黒猫の問いに、念の為先に回っておくと告げた。
「うむ。‥‥正面から立ち向かう程愚かではなかろうが、彼処は陸軍の中枢でもあるからな。何らかの情報が得られるやもしれん」
だが今は戒厳令が発令している。
厳しい顔つきで黒猫は呟いた。
「さぞや血気に逸っていることだろう。無用の騒動を起こす訳にはいかん。くれぐれも振る舞いには気をつけるんだぞ」
「分かってる。ざっと聞き取りを済ませたら直ぐに他所へ行くさ」
早足でビルヂングの階段を駆け下りながら二人は会話を終え。後は無言のまま人気の無い通りをひた走った。
「‥‥あいつ、死ぬつもりやで」
其の言葉が吐き出された瞬間、目の前が一瞬暗くなった。

次いで、漸く収まった怒りが瞬時に噴出し視界が赤く染まる。礼儀も矜持も、何もかもをかなぐり捨て、思わず目の前の任侠に詰め寄った。
「何故、何故止めて下さらなかったのです、」
「‥‥」
無礼を咎めるでもなく静かに佇む其の姿に、更に煽られた。
「佐竹さん、貴方なら、」
――俺よりも、あの人の過去を知る貴方なら。
「あの人が何を為そうとしているのか、言われずとも悟れたのでしょう、」
なのに、何故。
「何故、鳴海さんを止めて下さらなんだ、」
任侠はその時になって初めて少年と目線を合わせた。
「――あいつ、阿呆やからな」
そのくせ、いらんところでクソ真面目や。ああでもせんと、前へ行けんのやろ。
「あの男なりの、けじめいう訳やな。止めとうでも止めれんわ」
「‥‥分からない、どうしてなんです、死ねば其処で仕舞いでしょう、」
其れなのに、どうして。
「息しとったら其れでエエってモンでもないやろが」
お前ホンマは分かっとるんやろ。腰にぶら下げとるモンが飾りやないんならな。

「ええか、葛葉。あいつにとって其れは避けられへんことやったんや。そらわしやったら力ずくであいつ止めるンは簡単やで。せやけどなぁ、此の時ばかりは、其れやってもうたらあいつは文字通り、ホンマにアカンようになってまうて思たんや。それでもお前はわしにあいつ止めぇっちゅうんか」

少年はぐっと言葉を詰まらせた。

目を伏せ、湧き起こる激情を理性でねじ伏せているのか、年齢に似合わぬ険しさが少年の面に波打ち続ける。数分の時が過ぎ、やがて大きく息をついて目を見開いた少年の表情は何時も目にする冷静な其れに戻っており。そのまま沈黙を続けている任侠と改めて視線を合わせ、頭を下げた。

「‥‥無様な様をお目にかけ、申し訳ありません」

ゆるく首を振る任侠に再度、会釈程度に頭を下げ、少年は自らの靴の先を見詰め、落ち着いた口調で呟くように続けた。

「――――数日前から、様子がおかしかったんです」

「‥‥」

「それが何故なのか、俺はあの人に直接問いかけることが出来なかった」

何時かは話してくれる。そう信じていた心に嘘偽りはないけれど。

「しかし問うて拒否されることを、心の何処かで恐れていたこともまた事実です」

独白する少年は、静かに悔いた。

「でも、俺とあの人は、よくよく考えてみれば、――未だ、出会って数年にもなりゃしないんですよね。だから俺は、」

俯いていた面を上げ、前を見据えた。
「今は、あの人の過去なんて、殆ど何も知らない、だけど、」
知らないからこそ。
「あの人を、一人でいかせたりはしません」
すっと背筋を伸ばし。任侠の、見定める眼差しから目を逸らすことなく言い放った。
「こんな所で諦めるだなんて、冗談じゃない。全然足りない。俺は、もっともっと、あの人と共に時を過ごしたいんだ。其れを叶えるために後を追います。‥‥見苦しい姿をお目にかけてしまい、本当に申し訳ありませんでした」
全てが落ち着いた後、改めてお礼とお詫びに伺わせて頂きますので、今日のところはこれで。
「失礼します」
「ちょオ待て、」
そのまま踵を返そうとした少年を呼び止める。怪訝そうな顔でこちらを見遣る少年に、任侠は餞別代りに教えといたる、と副置きして続けた。
「あいつが何言おうと、何があっても、『うん』言うたらアカンで」
喰らいつくくらいの勢いで、ついて行け。
「‥‥」
「わしはそれが出来んくらいには年も食っとるし、あいつのこと知ってしもうとるからなぁ」
「———それは、」

「お前はそういうの厭がるかも知れんけど、子供じみた我侭や思われてもエエんや。寧ろ、それ位でないとあの男は動かせん。口先で理屈捏ね繰り回したかて、相手が悪い。あの無獣に口の達者な男に全部言い包められて仕舞いやわ」

せやからな葛葉ァ。

にやりと任侠は笑った。

「どこまでいっても独りよがりな考えから抜け出せんあの阿呆に思い知らせたれ。‥‥自分の思い通りに全て事が運ぶほど、世の中そうそう甘うないんやってことをな」

任侠が口にするには、らしいような、らしくないような科白を少々唖然とした雰囲気で聞いていた少年は、其の意味を悟った瞬間。鮮やかに、且つ不敵に微笑み、お任せをと応えた。

「ふんじばってでも連れて帰って参りますので。少々の間、お待ちくださいませ」

でも。

何かを言いかけた少年に先を促すと、正直、と僅かに複雑な笑みを浮かべ呟いた。

「少々、嫉妬します。‥‥女々しいですね、忘れてください」

では先を急ぎますので、と気を取り直して駅の方向へ駆け去っていく黒い後姿を見送りながら、任侠は男と交わした会話を思い返し。少々で済ませられて助かったわと苦笑した。

「‥‥お願いね」

運良く新世界のミルクホールに居た女性記者から、彼に関する情報を得ようと口を開いた瞬間。彼

女は少し前に彼が来たのだと呟いた。自分が何を問いたいのか、全て分かっているといった面持ちで、普段の騒がしい彼女とは別人かと思う程に淡々と言葉を紡いでいく彼女の、ひどく大人びた顔つきに、口を挟むことも忘れ静かに聞き入った。

最後に締め括るように呟かれた依頼に言われるまでも無いと力強く頷くと、其処で漸く彼女は小さな笑みを浮かべた。

それではこれで、と急ぎ足で踵を返す自分に向かって女性記者は声をかけた。

「本当、どうしようもない人だけれど。あの人、貴方が来たことで変わったわ。見捨てないでいてあげてねライドウくん。‥‥でも気をつけて、」

帽子の鍔に手をかけ、頷いて扉を開けホールを後にした。次は竜宮だ。

気安く入れる安価なミルクホールやカフェー、如何わしい雰囲気を持つバー等が立ち並ぶ一角を駆け抜ける。

戒厳令の発令下、いかな目抜き通りといえども流石に閑散としており。普段であれば銀ブラを洒落込む人々の喧騒や高級自動車や円タクのエンジン音、路面電車の走る音に紛れ、耳に届くことなど殆ど無い百貨店の表に吊り下げられた大日本帝国旗の風に翻る音が周囲に響く。此処最近になって突如姿を現した陸軍兵たちは、華々しい銀座の街角にあって酷く浮き、折角の雰囲気を損なう鼻つまみ者であったようだが、斯様な事態となって漸く本領発揮だとばかりに生き生きとした様子で辺りを睥睨していた。

霞台でも目にした其の尊大な様子に、醜いなと思う。だがこういった負の面もまた、帝都が持つ顔

のひとつなのだろう。
ふと大通りの向こうに目を向けると、何やら騒ぎがあったようで。黒猫と無言で視線を交わし直ちに駆け寄ると、どうやら此の状況下で気が大きくなってしまったのか。一人の陸軍兵がハンドル操作を誤り、一般市民の女性を犠牲にしてしまったようだった。腰を抜かしたまま息絶えた遺体を前にひたすら平謝りする姿に情けなさと憤りを感じたが、小さく首を振ることで振り払い、当初の目的地、竜宮のある一角へ向けて走り出す。
工事現場の脇を通り過ぎながらふと、先ほど感じたことを呟いた。
「タヱさんは・・・・」
「む、何だ」
同じく傍らを駆ける黒猫が応えを返す。
「タヱさんは・・・・もしかして鳴海さんのことが、」
「莫迦者」
ち、と舌打ちと共に窘められる。
「下らんことに気を回している場合か。――それ以前に、大人の女の事情に口を挟むものじゃない」
「嗚呼、其の通りだな。・・・・忘れてくれ」
苦笑し、栗須坂を駆け上り、高級料亭が立ち並ぶ一角の、更に其の奥まった処で暖簾を構える料亭へと向かった。
そうして辿り着いた其処は、遠くの方で微かに聞こえていた従業員の働く音も今は聞こえず、静ま

り返っていた。門扉から続く飛び石を踏み越え戸に手をかける。そっと引き開け、もしと声をかければ流石に無人ではなかったのか。幾度か通う内に自然馴染みとなった従業員の一人が顔を出したので一礼した。何も言わずとも彼女は心得顔で何時にも増して密やかに廊下の更に奥へと引っ込み、目的の人物を呼びに行ってくれた。

現れた彼女は何時ものように若竹色の着物を粋に着こなし、結った髪にも一切の乱れの無いきりりとした姿であった。会釈をする自分を認め、目元を和らげて近寄り。履物を履いて門前へと促した。差し障りのない挨拶を終え本題を切り出そうと口を開きかければ、何を思い出したのか。彼女は手で口を隠し、面白そうに笑いながら先日彼が久しぶりに此処までやって来た、と話し始めた。

矢張り此処にも顔を出していたのかと内心息を呑みつつ、適当な相槌を打ち先を促す。

「自分の命まで洒落の種にされちゃアかなわない。流石の私もつい笑っちゃってねぇ、結局ツケの一割も取立て出来ずに舌先一つであしらわれちまったって訳さね」

全くどうしたって憎みきれない御人だよ御宅の所長さんは。

可笑しそうに笑いながらそう締め括った彼女に、苦心して浮かべることの出来た苦笑で応じ。しかし途中発せられた『生命保険』という言葉が頭を巡る。

「ちょっと、ライドウくん。良く見たらあんた顔色が悪いじゃないか。あの人に何言われたって少しは休まないと身体が持たないよ。丁度今は戒厳令が出ちまってることだし、何時までもこんなところに居ないで早くお家帰って休みなよ」

「‥‥そうですね」

笑みを消し、心配げに覗き込んでくる彼女の視線を受け止め。ではお言葉に甘えてそうします、と安心させるように微笑んで一礼した。踵を返した自分へ向かってあの人に宜しく言っといとくれと声をかけた彼女に向かって僅かに振り返り、頷いて了承の意を伝え。後は無言で駆け出した。心臓がばくばくと脈打った。

「‥‥海軍省へ急ぐぞ」

敢えて何も言及せず、導きの言葉だけを吐き出す黒猫の存在が、今はただ有難かった。

鳴海氏が君を探していたよ。宗像を追って地下へ行くと言っていた。

情報と共に探るような視線を向けられたが、疚しいことなど一切ないのだと示す為に、平然と其の視線を受け止める。あの人は彼と如何なる会話を交わしたのか。また、其れによって如何なる疑いを向けられることとなったのか。其れが一切分からないことには迂闊な対応を取る訳にはいかなかった。

只でさえ、斑駒の一件以来この海軍将校からはあの人に対する妙な執着心が見え隠れしている。何に起因するものなのかは不明だが、現状にあってさえこのような視線を向けてくる程だ、どうやら根が深そうなことだけは感じ取れた。そして其れは、自分の知らないあの人の過去に関わるものなのだろう。――――腹立たしい。

しかし、だからといって下手に問い質しては逆に言質を取られてしまうだろうことは予想に難くない。あの人程くせ者ではないにせよ、彼もまたその道の玄人だ。警戒するに越したことは無かった。

「――――鳴海さんの様子に、何か変わったところは」

帽子の影で顔を隠しながら問いかければ、彼は暫し沈黙した後ゆっくりと口を開いた。
「彼は、本当に【鳴海】という名なのかね、」
「‥‥どういう意味でしょう」
「いや、‥‥」
思わせぶりな態度で口ごもる彼を、無表情のまま見詰める。
「‥‥まさか、な。もし彼が【彼】であるならば、存命は許されん。すまない、ライドウくん。おかしなことを言った。忘れてくれたまえ」
自らに言い聞かせるように、また同時にこちらの反応を窺うように目線をくれながら呟いた彼は、自分が何の反応も返さないことで一旦退くことにしたのか。即座に振り切るように言い放った。無言で頷き、場を辞そうとすると呼び止められた。
「君は、気にならないのかね。――彼の過去が」
マントを翻しながら振り向いた。何処までが演技か分かったものじゃないが、其れでも今の彼の表情は本気のものが滲み出ている気がした。
――何故其れほどまでに、お前はあの人に拘る。
ふん、と小さく鼻を鳴らす。
全てを嘘で塗り固めるのが彼らの職務だ。それなのに唯一、彼が私情で本気を滲ませたのがあの人に関することであったということが何より自分を不機嫌にさせていた。
――只でさえ苛立っているというのに。

「逆にお聞きしたい。――――気にしてどうなると仰るのです、」
くだらない大人の感傷に付き合ってやる義理はない。そう判断を下し、早く開放してもらう為に、惑う彼を問い詰める。
「気にしたところで何が変わるんです、宗像少将を止められるんですか、過去を変えられるんですか。気にしたところで何も始まりはしませんよ」
うんざりした。どうしてそんなことが分からないのだろうと思った。彼然り、――――あんな手紙一つ残したまま行方をくらました、あの人然り。
「俺にとってあの人は、」
そうとも。自分は、此れさえ分かっていればいいんだ。
「過去も現在も、全てひっくるめて【鳴海】さんなんです」
自分を注視する彼をひたと見据えて言い切った。
「そして貴方方もご存知の通り、俺にとってあの人はとても大事な人です。ああだこうだと手をこまねいている間に、むざむざと無くしてしまうなんて真っ平だ。だから俺はあの人を追って地下へ行く。ただそれだけのことなんですよ、俺にとってはね」
斑駒の一件を揶揄した言葉に彼は顔を歪ませた。どうやら苦笑したつもりらしい。
そうか、若いな、と呟いた後彼は表情を引き締め、元の無感情な声を発した。
「――――以前君が使った自動電話、あれはもう使えない」
「でしょうね。‥‥他に心当たりは」

「残念ながら確たる情報はない。内部の情報に詳しい人物が居れば或いは‥‥」
予想していたとはいえ、入り口が見つからないことには後を追いようも無く。一刻を争う事態だというのに、手に出来た情報のあまりの少なさに臍を噛んだ。しかし今直ぐにでも接触できそうな敵方の人物にも心当たりが無かった。万事休すか。
壁にぶち当たり立ち尽くす自分を見つめた黒猫は、現状にあっては流石に打開策を見出せなかったか。止むを得んと呟き。
「一旦探偵社へ戻ろう。何か手がかりがあるやもしれん」
気休めとは分かっていても、確かに他に行くべき所など無く。後は戻って僅かでも彼が始末し損ねた情報が残っては居ないか、――そんなことは万が一にもあり得ないだろうが、其れに賭けるしかなかった。

漸く辿り着いた最深部の手前で呼吸を整える。後は自分の背面にある階段を登りさえすれば、あの人との対面が叶うだろう。だが其の前に磨り減った体力を回復させなければ、いざという時の対処に遅れが出てしまうと思い、不思議と敵の気配の一切しない場所で、こうして小休止を取っているという訳だ。
こんな所で呑気に休んでいる場合じゃないんだ。
あの計画が実用段階まで来ているともなれば、ほんの一分や数秒たりとも無駄には出来ない筈なんだ。なのに、自分は、――――こんな所で。

はぁ、と時折大きく肩で呼吸をしながらちらりと腕に嵌めた時計を見て、目を伏せた。
施設自体が造船を目的に建築された巨大なものであることに加え、警護する連中が人外であるが故に、何時もとは比べ物にならないほどの細心の注意を払う必要があり。進入した時間から考えると随分な時間が経っていた。長時間に渡って緊張を強いられてきた身体は疲労の限りを尽くしている上、途中負った傷からもたらされる発熱が全身に回り、今にも倒れそうだった。
現役時代にも数度、危ない橋を渡る羽目になったことがあった。無論その時にはこのような傷をこさえるようなへまは犯さなかったのだが、昔と今とでは人外のモノの介入という、予測のつかない因子が存在している。其の点を考慮に入れれば、此の程度で済んで重畳であったと判断を下すべきかもしれない。とはいえ、矢張り鈍ってしまったのだろうかという思いは打ち消す事が出来ず、苦笑が口元に浮かんだ。
いよいよ正念場が目前に迫り、己が感情も幾分落ち着いてきたように思えた。
少年失踪の報を受けた時から、湧き起こる感情に突き動かされ続け、遂にはこんな所にまで単身乗り込んでしまった。今にして思えば、全くらしくもない。かつて失笑し、冷酷に切り捨てる道を選んでいただろう無謀な行為。そんなものとは誰よりも縁遠かった筈の自分が、三十路を過ぎて此の体たらくだ。全く人生って奴は何が起こるか分からない。
だが、此処へ至るまで何度も考え続けたことは無駄では無いし、自分のとった行動にも間違いは無いと思っている。
他の連中より頭が回り、運良く容姿にも恵まれて。其れだけで他人より何かが出来るつもりになっ

て。いいようにこき使われて。遅まきながら利用されていたことに気付けたはいいものの、世の中は理不尽だと拗ねて、背を向けることを選んでしまった。其れだけならまだしも、当時から数年を経た此の歳になって、未だに当時のままだったというのだから情けない。そして、そういった諸々のことの積み重ねが、この事態を招いたような気がしてならなかった。

しかし、ただひたすら、前を見据えて駆け抜けるあの少年という存在を知った今なら、分かる気がする。

自分は、逃げてはいけなかった。

無論自分だけではない。自分を含めた大勢の大人たちが、自分たちに与えられた為すべき事から目を背け続けてきたからこそ、今これほどまでの災厄が此の国を覆っているのだ。――厳密に言えば災厄などではなく、人災と言うべきなのかもしれないが。

直ぐ其処にある筈の姿を思い出し、切なさと悔恨と疑問が薄い胸に満ちた。

あの時、ほんの少しでも勇気を出せていたなら、あの人は自分に何か話してくれたのかもしれない。

無論たった其れだけのことで、自分如きがあの人の生きる道を変えられた筈だなんて、身の程知らずなことは考えてはいない。しかし其れにしたって、何がしかの変化を促すことができたのかもしれなかったのだ。

あの人は、悩んでいた。

其れが分かっていた筈なのに。自分は。

――あの人に拒絶されることを恐れ、部下でないことを言い訳にして、一歩を踏み出さなかった。

自分は、周りがもてはやすような勇ではなかった。
単なる、腰抜けに過ぎなかった。
だが其れを理解し、自覚した今、自分が出来ることを放棄して逃げるような真似だけはしたくなかった。何の罪も無いあの少年に全ての尻拭いをさせるのは我慢ならなかった。
後悔して。拗ねて。其れでも捨てきれぬ小さな矜持を後生大事に抱えて。靴の先ばかり見詰めて生きていくのはもう厭だった。
厭だと、思えるようになれた。
そんな青臭いものが、己の中に未だ存在していたことに気付いた時はひどく驚いたものだが、今は其れを目覚めさせてくれた少年に感謝している。
其のお陰で、こうしてあの人と対面する勇気が持てたのだ。

「なぁ、ゴウトちゃん。ライドウちゃん大丈夫なん」
エラい荒れてはるけど。あんな調子やとなんぼライドウちゃんが強い言うたかて、途中で息切れしてしまうわ。
尖った気配を発し続ける主の傍らに居てはつられて高揚してしまうので、一定の距離を空けて休息をとっていた彼女は形の良い眉を心配そうに寄せ、主を見詰めて呟いた。心が一つのことに占められている者を不用意に刺激することは望ましくないと、自らもまた、小僧よりは仲魔の方に近い距離をとっていた黒猫は、小僧には届かぬ声量で囁かれた仲魔の言葉に小さく首を振ることで応える。

「そうだな、お前の言う通りだ。此の侭では何時までもつか分からん」
「ほんなら、なんで、」
「止めぬのか、と、」
そう、と頷き、彼女は花を持った手を顔の近くに持ち上げ、命を縮めるかのような強行軍に身を任せ続ける主の姿を嘆いた。ひくりと髭を動かし、仕方あるまいと諦めた口調で答える。
「いくら俺があいつの目付けとして認められていようとも、こればっかりはどうにもならん。其れが、――――恋慕の情というものだ」
或いは業というべきか。だがそんなことはお前とて知っていよう。
見透かすような目で見つめてやれば、彼女は俯き。せやかて、と尚も続けようとした言葉を遮る。
「もし間に合わなければ、あいつは自分を一生許さんだろう。其れだけならまだしも、あの男を死に追いやった全てを、――――止められなんだ己自身ですら、憎んでしまうかもしれん。俺は、そんなあいつの姿を見たくはない」
此れまでかと思い詰め、探偵社に戻った自分たちが目にした者は他でもない、散々自分たちの邪魔をしてくれたダークサマナー、欧州最大にして最高のブルジョワだったロマネフ王朝の滅亡を招いた一因としても名高い、怪僧ラスプーチンであった。図々しくも所長のみが座することを許されている革張りの椅子に腰掛け、こちらを見据えてきたあの人造人間を目にし、積もり積もった腹立たしさと情をかける相手の特等席を奪われた怒りに身を任せ、咄嗟にライトニングを抜こうとした小僧を慌てて押し止め。どうせやるなら情報を得てからにしろと言い聞かせた矢先、計画の本格的始動を意味す

る衛星タイイツの打ち上げを示す軌跡が空を走った。何の気紛れか、空を見上げ戦慄する自分たちへ向かってあの怪しげな人造人間が提供した情報と二つの玉は、先へと進まなければならない自分たちにとって何より欲するものであったことは確かで。罠かもしれないことは承知の上と、磐石の準備を整え古井戸に飛び込んだのはつい先程のことだ。

幸い奴の言葉に偽りは無かったようで、見慣れた内部構造に安堵する暇も無く小僧は先を急いだ。あまた多くの悪魔や赤い憲兵に前を塞がれても、歩を緩める事無く仲魔を的確に召還し、無言で刃を振るいライトニングを撃ち続ける様は人とは思えぬほど鬼気迫るものがあった。

しかしどれ程腕が立とうとも、人間の身体には限界が存在する。息を切らしながらも先へ進むのだと主張し続ける小僧をやっとの思いで宥めすかせ。仲魔全ての回復を施させた後、膝上辺りまである貨物の端に腰を下ろし、疲労で項垂れている後姿を見詰める。先程よりはましになってきたとはいえ、未だ肩で息をしている。此の様子だと後数分の休息は必要だろうと、傍らで浮遊する仲魔を見遣った。

「お前たちからすれば愚かな感情かもしれん。だが其れこそが、人を人たらんとせしめる重要な何かではないかと、俺は常々思っているのでな。現に、里で初めて目通りした頃に比べたら、今のあいつは人として随分とましに見える」

だから、俺は。今回ばかりは余程でない限りはあいつを止めんよ。失わせたくは無い。

「今の俺に出来ることといえば、今のあいつを突き動かしている情動が誤った方向へ向けられぬよう、手綱を取ってやる程度だな」

造船所内には階段が多く、猫の身体には少々きついが、そんな肉体的な苦痛など今小僧が直面して

いる危機に比べれば大したことではなかった。錆びた鉄筋に掠めて血が滲んでしまった前足をぺろりと舐め、そろそろかと再び小僧の方へ目を向けると大分落ち着いてきたようで。呼吸が静まり、項垂れていた頭が持ち上がり。其の切れ長の目が前方を見据え始めていた。

「ふん、どうやら休息も終わりのようだ。お前、いけるか」

尾をぴんと立て、腰を上げながら彼女に問いかければ、彼女は勿論やと力強く頷いた。

「ライドウちゃん、自分が一番しんどいのに真っ先にうちらを回復してくれた。チャクラポットももろたしな、おばちゃん張り切ってライドウちゃん守ったるでぇ」

悪魔と言えど女は情に聡いし理解も早い。しかしか細い腕に力瘤まで作って応えた其の姿に少々引き気味になるが、まぁ頼もしいことは確かだ。

そうかと頷き、てくてくと小僧の下へ歩み寄った。

「・・・行けるか、」

前方をひたと見据えて小僧はひとつ頷いた。腰を上げ、管の調子や銃の弾数を確認する姿に冷静さも見出す。

異変を察知し、急いで駆け込んだ探偵社で残された手紙を目にした時から此処へ至るまでの道中、完全に頭に血が上っていた様子から、一時はどうなるかと危ぶんでいたのだが、頭の芯は冷えているらしい。異世界へと飛ばされた時の荒れっぷりから考えると、此の短期間で随分と成長したものだ。

後ろを振り返り、優しげな面に凛々しさが加わった仲魔の姿に満足し、喉を鳴らした。

「———行くぞ」

鯉口に手をかけたまま駆け出した小僧に遅れじと、仲魔共々駆け出した。

漸く辿り着いた最奥の地。かつて、アビヒコ、ナガスネヒコと名乗る二体の兄弟悪魔と刃を交え、囚われの身であった少女を助け出した祭壇が一望できる足場に立ち、眼下を見下ろせば、龍穴の直ぐ傍らにひっそりと佇む影が在った。

――――嗚呼、彼だ。

安堵のあまり胸中がじんと熱くなる。何分遠目で確かなことは判らないが、しかしよくよく見て取ると左の腕を負傷したのか、右腕で其処を庇っていた。無理も無い、只人たる彼が此処まで到達出来ただけでも奇跡に近いのだ。否、只人といえど【彼】だからこそ、辿り付けたと言うべきか。かの陸軍参謀本部霞台で耳にした、とある秘密将校の様々な逸話の数々が脳裏に木霊する。

しかし今はそのようなことを思い返している場合ではないと軽く頭を振って片隅に追いやり、漸く捜し求めることの出来た愛しくも薄情な彼の人の下へと静かに歩を進めた。

コツコツコツ、とそれでも微かに響いてしまう靴音に気付いた彼はぐっと眉宇を顰め、厳しい声色で鋭く誰何の声を上げた。ぎっと向けられた目線に臆することなく見返せば、彼は信じられないものを見たかのような表情を浮かべ、か細い声でライドウ、と呟いた。

己の無事な姿を見て安堵したのか、即座にふわりと微笑む彼の笑顔を見て改めて、嗚呼自分は間に合ったのだと実感が湧き。笑みを浮かべ、そのまま静かに彼の傍らへ歩み寄った。そうして彼と間近に接すれば尚のこと窺い知れる、面に浮かぶ色濃い疲労の影。よくぞ無事で居てくれたと思わず目頭

が熱くなったが、心から安堵するには未だ早いとぐっと堪える。
自分よりも逸早く我に返ったか、今にも倒れそうな其の細い身体をさり気無く支えようとする己の腕をするりと躱しながら、彼はどうして此処に、と呟いた。
「貴方を追って」
至極当然の回答を求められた学者のような面持ちで平然と答える。
「‥‥書置きをしていただろう、読まなかったのか、」
「読みましたとも。全又きちんと、最初から最後まで読ませていただきました」
何なら暗唱してみましょうか。
自然挑むような口調で続けた其の言葉にいや、と返答され。ならばと逆に問われた。
「ならば、何故」
「何故ですって、‥‥本気で問うておいでか」
ずいと一歩を踏み出せば、この流れでは長期に渡って自ら避け続けてきた話題に触れざるを得なくなると悟ったのか、彼は慌てて頭を振りながら否と返答した。このまま勢いに任せてはっきりと伝えてやっても良かったのだが、今はそんなものより怒りの方が上回っている。
目尻を吊り上げ睨みつける自分から一時目を逸らし、彼は自らの動揺を抑えるためか大きく深呼吸した。そうして止むを得ぬと判断したのか。其れまで浮かべていた表情の一切をかき消し、伏せ目がちに自らの過去の一端に触れる話を訥々と話し始めた。

「厭です」
「・・・ライドウ、聞き分けのないことを、」
「何を仰っても無駄です」
彼の言葉を遮る。
「そんな説教を受けて引き返すくらいなら、端からこんなところまで来たりはしません」
さぁここが正念場だと気合を入れ、決して退くつもりの無い自らの意志を彼に伝える。
「俺は、貴方と、――――共にいきます」
初めて本気で叱られたあの日よりも、尚一層厳しい眼差しで自分を見据えてくる彼から一切目を逸らすことなく、寧ろ受けて立つ程の決意を込めて睨み返した。
永遠に続くのではなかろうかというほどの長い睨み合いの後、彼は諦めたかのように目を伏せ。苦笑を其の面に浮かべつつ笑みを含んだ響きで以って口にした、退く内容の言葉に思わず血が頭に上る。
彼の言っていることは確かに正しい。襲名した其の時より、常に【ライドウ】として在らねばならぬ自分は、今此の場で退く訳にはいかない。だが、だがそれだけだと思われては困る。此処まで必死になって帝都を駆け巡り、追い求め続けたのは、他ならぬ――――、
湧き出でる想いをそのまま音にするべく口を開きかけたが、それを逸早く察知した彼は片手をすっと上げ、妨げた。
「いいから。そういうことにしておけ、いいな。・・・でないと俺も譲れないんだ」
交換条件ということか。

どうしたってただでは起きない彼の強かさはこんな状況下にあっても発揮されるらしく、少々恨みがましい思いを胸に抱きながらもその条件を受け入れる。しぶしぶといった風に頷いた自分を見て気が緩んだのか、いい子だ、と呟いた彼の顔に浮かんだ穏やかな笑顔を目にし、自然身体が動いた。

負傷箇所を押さえる彼の腕を掴み、不審げに顰められた顔を気にせずそっと其れを引き剥がす。大事には至っていないようだが、それでも赤く腫れた其処から生じる痛みを察するには充分で。痛ましさに眉を顰める。そんな自分の表情を見た彼は早口で、なんて事はない、等と嘯いたが、そんなことはもう耳に入ってやしなかった。

困ったように微笑む彼と目線を合わせ、緩やかに両腕を上げ、彼の両脇に差し入れる。更に一歩踏み出し、傷に障らぬよう気をつけながら差し入れた両腕で彼の背中をかき抱いた。直ぐ傍で彼のひどく慌てたような声が響くが気にもならなかった。初めて自分から身を寄せた彼の痩身に回した腕が、少々余った。生じた僅かな隙間にも我慢がならず、感情の赴くがまま更に彼の身体を引き寄せ、全身で彼に触れる。互いの布地を通して伝わってくる鼓動、肺や腹部の動き。体温。鼻腔を擽る彼の匂いと微かに混じる煙草の香り。何時もより薄く感じる其れは、彼が数日前から煙草を断っていることを示し、また彼がこの潜入作戦を衝動のままに行った訳ではなく、行うべきものとして計画を立て、実行したのだということを如実に物語っていた。

身体を強張らせる彼に気付かないでもなかったが、足りなかった。

彼に擦り寄り、頬に唇を押し付ける。其の感触に彼が硬直したのをいいことに、そのまま髪に隠れた彼の耳元まで唇を這わせた。現れた其処に会えなかった分も込めた、ありったけの想いを乗せて彼

の名を囁き。逃げられぬよう後ろ手で頭を押さえ込み耳朶に唇を寄せ甘噛みした。鼻腔を擽る彼の体臭。以前は薬草の香りと共に届いた覚えのある其れに心が熱くなった。

嗚呼、――嗚呼、彼だ。

触れ合った身体が、震えた。

封魔の折にすら滅多に見せることの無い冷徹さが売りである弟子の、時として名の通った悪魔ですら屈服させるほどの肚の底からの力が篭った其の眼差しに、一歩も譲る気配のない男の様子を見て、矢張りライドウの相方を任ぜられるだけのことはあると改めて感心しながら、さてどうなるか、と黒猫は気配を潜めて先を見守る。

両者、一歩も譲らず。

そのまま数分の時が過ぎ。

やがて道を譲ったのは、――男の方であった。

詰めていた息を静かに、ゆるりと吐き出し。傷が痛むのかほんの僅かに眉宇を寄せ、だが何時ものように情けなく眉を下げながら、男は参ったねこりゃ、と呟いた後嬉しそうに微笑んだ。またそんな男の様子を見て張り詰めていたものが緩んだのか、弟子の身体から余計な力がゆるゆると解かれていく。其の後ごちゃごちゃと遣り取りが続いているようだが、雰囲気的に深刻なものは伝わってこない。

そんな二人の様子を目にし、自然固まってしまっていた己が身体を解し、やれやれと安堵した。とはいえ、未だ計画は阻止出来ておらず、宗像もまた健在であることから完全に気を抜くには早いのだ

が、それでもあの手のかかる男を引き戻せたことに間違いはなく。少なくともこれで以前から懸念せざるを得なかった男の態度も改まるだろうという意味では、この結果はまさに重畳であった。
しかし男と相対している弟子の方はといえば未だ完全には気が抜けないのか、眼差しの強さを緩める気配もない。
すっかり疑り深くなっている弟子の姿を見て、全く尻の青いひよっこめが、と呆れないでもないが、自分もまた男に対し少なからず心配させられた腹立たしさもあったので、助け舟も出さず成り行きを見守ることにする。身を伏せた己の上の空間に浮かんでいる花を手にした乙女は、そんな幼い主の様子を見て、あらあらと面白そうに微笑んでいた。普段であれば不敬であるぞと其の態度を戒めるのだが、此の時ばかりはその気も起こらず。寧ろ一部始終を目撃された挙句後で二人揃って仲魔全員から揶揄われてしまえ、と大人気ないことを思った。

既に【鳴海】ではない貌を覗かせていたであろう自分から、全く目を逸らさずにそう言い放った少年の、只ひたすらに前を見据える其の眼差しに、自分が遠い昔に失ってしまった筈の何かを再び見出し。全ての始まりはもしかすると少女からの電話などではなく、此の少年と初めて出会ったあの時がそうだったかもしれない、と思い返した。
そういえば、こいつにあんな風に言葉を遮られたのって、さっきのが初めてじゃなかったっけ。
凝り固まった何かが薄れていくような、足元がぐらつくような不安と共に、しかし生まれ行く新しい何かの存在を感じた。だが全面的に少年の言い分を受け入れる訳にもいかなかったので、条件付で

自らの過去の決着の場に少年の同行を許した。
そうして次の瞬間。万事控えめであった筈の少年の、何時になく強引な行動に不意をつかれた。
目的の場所に到達するには直ぐ其処の階段を登ればいいだけ、というような、非常に危険な場所であるにも拘らず、既に流され気味の己が現状。
しかし、まさかこのような行動に出られるとは、露ほども思っていなかったのだ。
何時だって抱きつくのは自分で、其れに対し少年は、ただただ気恥ずかしそうに其の身を縮めるだけだった。それなのに。――それなのに、今、こうして我が身を捉える少年の体躯といったら。
自分より五センチ程背丈が低いことを感じさせない其の長い両腕は自分の背中に軽く巻きつき、まだまだ余裕を感じさせる。いくら通常の日本男児より痩身であることを常としている我が身とはいえ、こうも包み込まれるように腕を回されては些か複雑にならざるを得ない。おまけに前と比べて、腕も、ホルダー越しに感じる胸板も、随分と逞しくなっているような気がした。
だがそんな呑気なことを考えていられたのもほんの僅か。直ぐ様引き寄せられた其の腕の力に驚愕し、上半身だけでなく身体が完全に密着した状況に狼狽する暇もなく頬を寄せられ。控えめな、しかし拒否することを許さぬ口付けを頬に落とされた。
何だそれ。こんなところで仕返しか。
かつて、自らが少年に対し積極的に行っていた行為とほぼ同じことを今度は少年から行われ、動揺した頭でそう思ったのも束の間。なんと少年は其処で退くでなく、あろうことかそのまま唇を滑らせ自分の名前を囁いたと同時に耳朶を咥え込んだ。

時間が一瞬止まった。
次いで全身にかっと血が巡る。
何が一番不味いかって、そんな少年の行為に思わず反応しかけてしまった己が身体だ。
確かに快楽には弱い。其れは認める。しかし自分で把握している限りでは、健康男子として一番の山場である十歳後半から二十代前半に在った頃だって、いよいよ決戦の時というような大事な状況で反応するほど、節操なしではなかった筈なのだ。なのに、今我が身を襲う状況はこれ如何なることか。
背筋をつつつ、と脂汗が垂れる。
若し僅かでも反応しようものなら、此処まで密着されているのだ、少年が察しない筈はない。
此処に辿り着くまでに感じていたのとは別の緊張感が走る。
落ち着け。極度の緊張状態に長期間晒されたとき、男の身体というものはうっかり反応してしまうことがあるという。そういえば少年が行方知れずになった折から程度の違いはあれど自分はずっと緊張し続けていたのだ。自分の今の状態は其れに当てはまると考えられる。否、そうに違いない。そして未だ耳朶に吸い付き、時折首筋を掠める少年の息使いに背筋がぞわぞわするのはくすぐったいからだ。胸の奥が変に疼くのは、心の何処かで無理かもしれないと思っていた少年が無事であったことをこうして抱き合うことによって漸く実感できたから、それで嬉しさを感じている所為だ。身体が熱いのは、負傷による発熱がいよいよ全身を巡り始めた所為だ。そう、屹度そうに違いない。
心が完全に動転してしまう前に、鍛え上げた判断能力が慣れた動作で状況を噛み砕き、理解していく。何処かしら腑に落ちない感があったものの、其れは概ね納得できる理由ばかりで。おいおい何を

焦っているんだと自らに言い聞かせ、未だ張り付いて離れようとしない少年の背を、無事な方の腕を使って安心させるように二、三度小さく叩く。すると漸く耳朶を開放してくれたは良いものの、少年は腕を緩めるでなく、今度は首筋に頭を埋めてきた。

あまり大仰な動作も言動もとれず、一向に開放してくれる気配のない少年の扱いに弱り果て。何か助けはないものかと辺りを見渡せば、少々離れた場所に黒い獣の姿をとった少年の目付けの、頼もしい翠の両眼があった。彼の上部には桃色の髪の、花を一輪手にした乙女が面白そうな表情を浮かべながら浮いている。地獄に助けとはこのことかと、少年には些か失礼なことを思いながら、両者に、特に翠の両眼に向かってこいつをなんとかしてくれと目線で助けを請うた。

元より、彼の前では今更なのだ。

もういい年をした男から泣きそうな目であからさまに助けを請われ、よいこらせと腰を上げる。あらまぁもう止めてしまうん、ええところやったのにと残念そうに呟く少年の仲魔に対し、其れは同感だが何時までもそうさせていい状況でもないと其の意見を一蹴した。

ひらりひらりと音も立てず軽快に階段を下り、意中の相手を腕の中に閉じ込め、少々暴走気味の弟子を一喝する。

「いい加減にせんか、状況を弁えろ。色気づいてる場合か、計画は未だ進行しているのだぞ、宗像を止めるんだ」

突然脳裏に響き渡ったのであろう其の言葉に驚いたのか、少年はびくりと身を竦め。腕が緩んだ一

瞬の隙を逃さず男はするりと其処から抜け出した。はー、と安心したように息を吐き出して、ずれてしまった帽子の角度を整え、再び自らの負傷箇所を押さえている。
優秀な仲魔は主から命ぜられるでもなく、あらゆる意味で危機的状況から抜け出し安堵する男を守るため、すすすとその傍らへ身を寄せる。男はといえば嗚呼初めて見る仲魔だなぁ挨拶しなきゃなぁとは思うものの、既に先程の行為を全て見られていたことが判明している相手に意味ありげに微笑みかけられ、何とも改まった挨拶を言い出しかねて苦笑をただ其の面に浮かべるしかなく。挙句、嗚海ちゃんてかわいらしいなぁと笑われてしまっていた。
一方確たる序列の存在する少年と黒猫の方はといえば、少年はひそひそと謝罪の言葉を繰り返し、それに対して黒猫が叱りの響きを持つ鳴き声で二、三語鳴いた後軽く頷いて腰を下ろしていた。
そういえば此の黒猫とも会うのは久しぶりなんだと遅まきながら思い至り、膝をつき、相好を崩して其の毛並みを撫でる。すると誇り高い彼にしては珍しく、ただの猫のように頭を手の平に擦り付けてきた。言葉が通じない自分相手だからこそ、時折許してくれる親愛の仕草だ。
微笑を浮かべ、少年の方を見上げると、少々どころでなく不貞腐れた顔でそっぽを向いていた。そしてそんな少年の様子を一顧だにしない黒猫。
そんな変わらぬ彼らの様子を見て、男は先程まで感じていた悲壮感が欠片も自らの胸中に残っていないことが判った。そして、その代わりに、何としてでもあの方の計画を止めるのだと。全員で生きて探偵社へ帰るのだという決意が胸に満ちていた。
生気に満ちた微笑を浮かべ、拗ねたままこちらへ顔を向けようとしない少年に。自分の思い上がり

を其の信念と行動で以って打ち砕いた彼に向かって言い放つ。
「さぁ、ライドウ。――正念場になるぞ。準備はいいか」
「――無論ですとも」
振り返り、にぃ、と不敵に微笑む少年を従え、頭上に聳える高台へ向けて踏み出した。

「くっ……、」
「ライドウ、」
咄嗟に声をかけるが少年は返事を返すどころでなく。まさに紙一重という危ういところであの人の、――否、あの方に巣食っている禍々しい悪魔、【スクナヒコナ】の攻撃を躱した。ぐっと引き寄せられた眉と目にしたことも無い厳しい顔つき。後退しながらもその胸元に忍ばせた腕からすっと引き出された管から伸びる蛍色の光とともに出現した少年の、仲魔。其の全身が現れ出でるより早く、鯉口を握った少年の左手の親指は透かしの入った鍔を軽く弾き、素早く管を元のホルダーに仕舞った右手が突出した柄をぐっと握りすらりと引き抜いた。そしてその刃は間一髪、あの方の身体を使って繰り出された軍刀の一振りを音を立てて受け止める。かつて丑込め返り坂で目にしたものと同一の、しかしあの時よりも遥かに力強く素早いその動き。彼らはそのままじりじりと刃を合わせ、焦れたスクナヒコナが人間にはおよそ不可能な程の速度で後退した直後、生じた一瞬の隙を縫って少年は言葉を放った。
「鳴海さん、下がって、」

「しかしライドウ、宗像さんは、」
「もう無理です、スクナヒコナの言う通り此の人本来の意識は、全く残っちゃいない。髄まで乗っ取られているんです、」
そう答えた後、先程召喚した、黒いサリーを身に纏い全身を紅蓮の炎で包まれた仲魔の援護を受けつつ、少年は再びスクナヒコナと切り結んだ。
「だけどライドウ、」
だけど、此の人は、俺の。――――俺の、
何を口走ろうとしたのか。自分でも理解できないまま、更に言葉を連ねようとした自分の行動を察したのか、舌打ちをした少年は皆まで言わせず言葉を重ねた。
「此の俺が無理だと言ってるんです、」
一気に詰められた間合いから振り下ろされた刃を受け止め、硬質な金属音が周囲に響く。
「こいつはもう貴方の知ってる人じゃない、」
どれ程重い一振りか。歯を食い縛り、全身の力で以って耐えているらしき少年の声は苦しく、絞り出すようなもので。しかし其の目は負けじとばかりに間近で威嚇するスクナヒコナから一時も離さずに睨み据えていた。
果たして少年の刀が軍刀を弾き返し、相手が仰け反った所を黒衣の乙女が高速で放った炎が襲う。
「いいから、此処は俺に任せて、」
瞬く間に火達磨となり、硬直したその隙に少年は幾度も刀で切りつけるが、数秒後には可聴範囲外

にまで響き渡る、まさに異形にしか出し得ない声を上げながら硬直から解き放たれたスクナヒコナは再び後退した。そして何やら唱えたと思った次の瞬間、出現した半円型の赤い物体に四本の手と顔の付いた異形が少年へ向かって浮遊した。事前に察した少年が其の動きを躱した直後、最初に放ったものと同じ光の渦が再び少年の仲魔に襲い掛かる。避け切れぬ位置にいた仲魔を寸での差で管に戻し、光線を発している間は身動きすることがかなわぬのか、あの異様な高速移動を止めている敵へ向かって自ら駆け寄りながら少年は叫んだ。

「直ぐに終わらせます、苦しませたりはしません、ですから、」

しかし少年がその刀を振りかぶるより先に向き直られ、威嚇の声と共に軍刀が振り上げられる。

「――だから、」

ギィン、

「・・・だから、つべこべ言わずに其処で待ってろ、いいなっ、」

叱咤した其の位置で更に一合、二合、三合と切り結び、相手の動きについていくことは不可能であると判断したのか、後退する悪魔を少年は再び追うような真似はせず、仲魔を召喚し直した。

初めて己に向けられた少年の、容赦ない言葉と。

初めて目の当たりにさせられた悪魔との、戦い。

その相対している敵は。

言動と挙動、そして口の中から現れ出でし悪魔の存在によって既に在りし御姿ではないと判ってはいる。だがそれでも、間違いなくあの時、あの場所で、掛け替えの無い時間を共に過ごした、――――

あの人。
少年の凄まじいとしか形容のしようの無い戦い振りと、かつて慕いし人のあまりに無残な変わり様に口を挟むことはできず、傷ついた腕を抱え、呆然と立ち尽くしながら彼らの死闘を見詰め続けた。
そんな自分の足元の布地にちょいちょいと触れられる感覚を覚え、ゆるゆると目を向けると、其処にはちょこんと座った黒猫が、にゃあと鳴きながら再び自分のズボンの裾に手――否、前足をかけていた。
「‥‥何」
ぼんやりとした口調でおざなりに尋ねる自分に怯むことなく黒猫は口を開き、ズボンの裾に触れ続ける。
ニャア。(少しは休め。今のお前に出来ることはそれくらいだ)
「何だってェの、‥‥俺は此処で宗像さんとライドウの、」
シャーッ、(ええい、聞き分けのないっ、)
今度は黒猫にまで言葉を遮られ、牙を見せられ叱り付ける様に鳴かれてしまった。木偶の坊のように立ち続ける己を見た黒猫は仕方ない、といった風に目を細め、髭を震わせ其の場に下ろしていた腰を上げた。そのまま手近な位置にある裾の一部をゆるく咥え、くいと引っ張る。
嗚呼、よせよ。生地が傷むじゃないか。
そんな今更なことを考えながら、黒猫の意図を推し量る。
「‥‥付いて来いって、」

ニャア、と黒猫が返事するのと重なるように、再び背後でゴォオオン、と随分と大きな振動と金属の切り結ばれる音がした。

判断力の低下した頭脳は自ら思考し続けることを放棄したのか、危険回避の為に黒猫の指示に従ってしまえとのみ命令を発している。それに逆らう気力もなく、足を動かし始めた自分の姿に満足したのか、黒猫は咥えていた布を離し付いて来い、とばかりにその長い尾をひゅい、と動かし。自分が間違いなくついて来ているかどうかを時折確かめながら、彼らが戦っている場よりも二、三段下の位置にある足場にまで連れて来た。背後を振り返れば、下りの階段。此処を降りると、先程自分と少年が再会を果たした場所に辿り着く。

嗚呼、成る程。此処は彼らの戦いが見渡せ、且つ先程の位置よりも安全な場所だ。

すっかり守られてしまっている自分に情けなさを感じながらも、所詮は只人に過ぎぬ我が身では此の状況は如何ともし難く。また腑抜けてしまっている自覚もあった。そして今、自分に出来る事といえば、まさに文字通り命を懸けて戦っている少年の足手まといにならぬようにすることくらいしか無いこともまた事実であった。

飾りっ気の無い金属製の柵にもたれかかり、そのままずるずると腰を下ろす。

五感全てが、一枚の膜で覆われているようだった。

座り込んだまま言葉もなく呆然と前の激闘を見詰める男の、このような状況になって漸く剥き出しにされた表情を眺め、全くこの莫迦者が、と眉を顰める。

しかしそれでも心に酷い衝撃を受けたまま回復できていない者を相手に怒り出すようなみっともない真似は出来ず。今はそれどころでないというにと思いつつも今は不肖の弟子の力を信じ。すっかりしょげ返っている此の図体ばかりでかい子供の面倒を確り見てやることが自分に任された第一の仕事とした。さすればあの小僧も、安心して戦えるというものだろう。

普段は忌々しく思うことの多い猫の身体の特性を、今ばかりはと存分に生かし。負傷した箇所に障りの無いよう、男の腕と身体の僅かな隙間からするりと其の懐へ入り込む。突然生じたぬくもりにびくりと身体を揺らしてしまった男は直ぐ様その報いを受け、痩身を襲った痛みに呻いていた。

だから気を遣ってやったものを。莫迦め。

相も変わらず手のかかる男だ、と内心舌打ちをしつつも上半身を伸ばし、俯いている所為で常よりも下の位置にある男の顎をざらりと舐め、額を擦り付ける。受けた衝撃に涙すら流せず、ただ呆然とするばかりな男の顔を更に前足でぺちぺちと叩いて刺激を与えてやれば、はっとした目線が向けられ。ずっと強張ったままだった身体から次第にゆるゆると力が抜けていくのが判った。また其れと共に、虚ろとなってしまっていた男の眼差しに、未だ弱々しくはあるがそれでも力が蘇って来たのを認めた。

間近な位置にある負傷箇所を覗き込むと、どうやら銃弾が掠って出来た傷であるらしく。中心部分では棒状に皮膚が剥げ、それを取り囲むように赤く腫れた火傷が出来てしまっていた。止血はしているものの、この有様ではさぞや痛むことだろう。何より懐に入った折から感じている此の男の体温が、普段の其れに比べ幾度高くなっていることが気になった。緊張状態にあったが故かと思っていたが、半分程度は此の傷による発熱と診た方が良さそうだ。しかし一向に手当てをしようとしないところを

みると、手紙で『帰りを待て』と示した割に、本人は最低限の治療用具すら所持していないらしい。実際の活動を目にした訳ではないので確信は持てないが、此の男の噂を耳にする限りで良い様に判断すれば『必要になることが先ず有り得ないが故に持って来てはいない』と予想することができるが、今回に限り其れは甚だ怪しいものだと思わざるを得なかった。

仕方なく隠し持っていた傷薬を男に向かって差し出してやると、其れが何なのか一瞬分からなかったようだが、やがて黙って受け取り。無言で傷口に塗りたくる男の動きを観察しながら一先ずは落ち着いたか、と思う。

やれやれ。

猫の身ではつきにくい筈の溜息が漏れ出でる。

やれやれ。‥‥これで漸く我が不肖の弟子の様子を気にかけてやることが出来る。

簡単な手当てを施しただけの、傷を負った腕をだらりと投げ出し、ゆるりと猫の身体を抱きしめてくる男の右腕の動きを抵抗することなく受け止めてやり。時折耳を掠める男の吐息がくすぐったいのだがなぁと思いつつも、かつて無い程の強敵を相手に戦いを挑みながら、それでも気になるのか時折ちらちらとこちらの方へ気を散じてしまっている未熟者へ向けて思念を飛ばした。

鳴海は一先ず大丈夫だ。お前はお前の為すべきことを為せ。

目付けの声がうわんと脳裏に響く。其の内容を理解すると同時にそぞろであった気を瞬時に引き締め直し、襲い掛かってくるスクナヒコナの軍刀を受け止める。一合、二合、そして三合目、競り負け

たと悟った瞬間押される勢いを受け流し、身を持ち崩す前に後ろへ飛び退った。先程と同様に高速で後方へ移動したスクナヒコナはヒルコを数体召喚し、其れらが一斉に襲い掛かってくる。動きを見極め、寸での処でそれらを振り払い、急いでその場から移動する。これまでの様式からすると次は熱波で攻めて来る筈。そう予想し召喚していた仲魔を管に戻した其の瞬間。違わず、異音の祝詞と共に発せられた熱線が烈風を伴って襲い掛かってきた。

辛うじて直撃は免れたものの、烈風に吹き飛ばされる。空中で体勢を整えながら、ホルダーからコルトライトニングを引き抜き、素早く安全装置を外し高速で迫ってくるスクナヒコナへ、――否、正確にはスクナヒコナの操る宗像へ向かって標準を定め、引き金を引く。衝撃音と共に暴威弾が三発発せられるが、銃撃に耐性を持っているのか、一向に損傷を受ける気配がない。

――厄介な。

小さく舌打ちし、銃撃による足止めを諦め斬撃のみの攻撃態勢に切り替えた。

かつんかつんかつん、と床に落ちた葉莢の位置を目の端で確認する。あれに足を取られて転びでもしたら目も当てられない。

地に叩きつけられる前に受身を取り身体を転がし負荷を最小限に止め、身を起こすと同時に銃を仕舞い管を引き抜き、今度は花を抱く嫋やかな乙女を召喚した。新たなる仲魔の出現を目にし、不快気に威嚇するスクナヒコナに向かって飛電を打たせ、一瞬足を止めた隙に駆け寄り渾身の力で陰陽葛葉を振りかぶった。

しかし攻撃の合間の一瞬の隙に後退され、二度のヒルコ召喚を躱す内に仲魔を封じられそうになる

が、術の完成前に辛うじて管に戻すことに成功した。この忌々しい封術によって既に仲魔が三体、やられてしまっている。これ以上戦力を落す訳にはいかなかった。
術の終了を見届けると同時に仲魔をすかさず召喚し、空になった管と入れ違いに道具を取り出す。
「ライドウちゃん大丈夫、回復したげよか、」
度重なる斬撃と魔法攻撃をくらい、随分と下がってしまった体力を察した乙女の申し出を首を振ることで答える。
「問題ない、攻撃の手を緩めるな。あと少しだ、」
宝玉を飲み込み、体力を瞬時に回復させた後、再び切り結ぶ為に駆け出す自分の後姿に仲魔から声がかけられた。
「無理せんといてや、」
心配げに眉をひそめ、しかし己が命令に忠実に従った乙女が放つ飛電の一条の筋がスクナヒコナを直撃した。サクリファイスで魔力を高めた乙女の其の一撃に、相手が全身をびりびりと硬直させた隙を逃さず、一気に切り刻んでいく。一方的に加えていく連続攻撃に、やがて仲魔の戦闘意欲が高揚したことを感じ取り、合体技を放った。
轟、と音と振動を立てながら眩い閃光が周囲一帯を照らし出す。
防御を取る猶予も無く直に食らってしまったスクナヒコナは、断末魔の叫びと共に無念の呻きをその小さな口から漏らし、やがてゆっくりと地に伏せていった。

「終わったか、……ご苦労。お前にしては良くやった」
戦闘が終了したのと同時に、自らを柔い力で抱き留めていた男の腕から完全に力が抜け、黒猫はそのまま寄りと間を抜けた。
かつてない死闘に息を切らしながら血振りを済ませた刀を仕舞った弟子の下へと駆け寄り労いの言葉をかける。すると少年は伏した宗像とその口内に潜んでいたスクナヒコナを見詰め、ああ、うん、と頷いた後、きょときょとと不安げに黒猫の更に背後を見遣った。
其のあまりに正直過ぎる反応に青いなと思わないでもないが、経緯が経緯だ。其れに加えて今於かれている此の状況は、黒猫自身にも先程とは違った意味で気がかりだったので小言は無しにしてやり、弟子と同じように自分の背後を振り返る。――――音も、気配も無く、まるで幽鬼のような足取りで、倒れ伏した其れに歩み寄る男の姿を目で追う。
男が近付くにつれ、漸く息の整ってきた弟子は無言で後方に下がり。くいと帽子を深くかぶり直し、一定の距離をおいて佇んだ。その足元に自らもまた、猫の身体を移動させ腰を下ろす。勝利の余韻に頬を染めていた弟子の仲魔は打って変わったその厳粛な雰囲気に流石に何かを悟ったのか、何時も浮かべている慈悲深い笑みをかき消し。主である弟子の斜め後方の位置へと静かに移動し、共に主の想い人の姿を見詰めた。
そんな自分たちの様子など目にも入らぬのか、男は一瞥もくれることなく。左腕の傷を押さえながらかつての、――――どうやら見ている限りでは当人に自覚は無かったようだが、弟子の勘繰り通り、ある特別な思いを抱いていたのであろう相手の元へと歩み寄った。

物言わぬ骸となった其れに無言で歩み寄る後姿を静かに見守る。
何を思い出し、何を考えているのか。僅かに距離をあけて佇んだまま暫くの間立ち尽くしていた彼が、やがて傍らに膝をつき、遺体に手を伸ばしたのを目にし、咄嗟に身を乗り出しかけたが、同じく自分の足元に控えた黒猫から小さく叱咤され、ぐっと堪えた。
「逃げた俺に、貴方に触れる資格はないのかもしれないけれど・・・」
一瞬乱れた背後の気配に気付いているだろうに、其れに反応を返す事無く彼はそう囁いて更に手を伸ばし、眼鏡を外して、虚ろな眼差しを覗かせていた瞼をそっと閉じた。
そして徐に膝を伸ばし、一歩退き。前に屈み気味であった背筋を伸ばし。流れるような動作で、彼はかつての上官へ向けて、かつての姿を髣髴とさせるような敬礼を捧げた。
振り返り、やっと自分たちの方へ向けたその顔には哀しげな微笑が浮かんでいた。無言で見返せば何を思ったか、彼は其れを苦笑の形に変化させた。
「――泣いてるとでも思った」
「・・・いえ、その」
返答にまごついた己の頭を帽子越しに撫でられた。
「莫ぁ迦、泣かねぇよ。――――この人の前で、そんなみっともねぇ面は見せられねぇ」
それにな。
喜びか哀しみか。判別のつけがたい、だが今にも泣き出しそうな笑顔を、彼は浮かべた。

「この惨劇を具体的に計画したのが、宗像さんじゃなく、このクソ悪魔だって分かって。‥‥正直、ほっとしたんだ」

この人は国を想う心を利用されてしまっただけで、変わってしまった訳じゃなかった。

「其れが分かっただけでも、俺は嬉しいんだ。言葉が交わせなかったのは辛いけれど、元より逃げる道を選んだのは俺だしな。――自業自得なんだろうよ」

静かに笑い、やがて遠い眼差しで何処かを見据えながら彼は昔語りを始めた。

幾度か子供のように頭を撫ぜられたことはあったが、自分から手を伸ばすなんてことは何やら畏れ多い気がして。そう望みながらもずっとできずにいた。

そして、別れて。時間が経って。こうなってみて。漸く自ら触れることのできたその人の肌は、もう随分と冷たくて。油断をしたら涙が出そうだった。

だがそんな女々しいところを、大日本帝国陸軍少将たる此の御方の前でお見せする訳にはいかない。腹にぐっと力を込め、堪える。

膝を伸ばして一歩下がり。背筋を伸ばし、音を立てて踵を揃える。全身の姿勢を正し全ての指を接した右手を挙げ、食指と中指をダービーハットの庇右側に当てる。掌はやや外側、肘は肩と同位置の高さに。

一連の動作を、そうと意識せずとも自然と身体が覚えていたらしい。脳裏の片隅で苦い思いを噛締めつつ、眼を閉じて横たわる彼を注視し、敬礼を捧げた。

彼処を抜けてからは決してするものかと心に決めていた動作ではあるが、此の方を前にして、これ以外の所作はどうにも思いつかない自分が其処には居た。
そして彼に向かって最後の微笑みを向け徐に振り返れば、やや離れた箇所から己を見詰め、ただ無言で立ち尽くしている少年と黒猫の姿があった。彼らの傍らには痛ましげな表情で顔を曇らせた少年の仲魔が浮遊している。どうやら随分と案じられているようだ。後追い自殺でもやらかすと思われたか。確かにそう思われても仕方の無い有様ではあったと自らの様子を思い返し、少年へ向けて先程教えたことより多少詳しく自らの過去を語ってやる必要性を覚えた。
どこまで言ったんだったかなぁ。
ほんの数分前の記憶を探り出し、訥々と語り出す。
この人と同じ陸軍に居たこと。知らなくてもいい事をたくさん知ってしまったこと。その中で自らが存在する為の意義を見失ってしまったこと。自分から行動を起こそうとはせず、ただ拗ねて全てに背を向けたこと。
――それが、間違いであったこと。
目を伏せ、自戒を込めて呟いた。
「人は、その出来る範囲でやるべきことをやらねばならない・・・・」
そして、綺麗事を言うでもなく、ただ己が行動のみで、曇った目を開かせてくれた少年へ目線を合わせた。
「お前を見てて、そんな気がしたんだ、ライドウ」

「ですが鳴海さん、」
深刻な顔でおずおずと遠慮がちに口を開いた少年を見て、思わず噴出した。途端に顔を赤くして何で笑うんです、と怒った口調で問い詰めてくる少年に、いやいや、と頭を軽く振りながら答える。
「――――人にあんなタメ口叩いといて、今更になって元通りに話すからさ、」
俺、お前からあんな風に言葉をぶつけられたことなんて今まで全く無かったから、結構吃驚したんだぜ。お前、結構きつい物言いするんだな。
戦闘の折に自分へ叩きつけられた少年の言葉を揶揄しながら微笑みかける。すると少年は怒りで染まった頬を途端に羞恥の其れに変え、慌てて頭を下げて侘びた。
「は、いえ、その、戦闘中で気が高ぶっていたものですから、つい。‥‥失礼しました」
そんな彼の頭を右手で軽く叩き、痛みと熱を発する負傷箇所を押さえ直す。
「お前が謝ることじゃない、あれは俺が悪かったんだ。お前は正しい指示を下した。それだけのことさ、怒っちゃいないよ」
「しかし、」
「いいんだって。‥‥寧ろ敬語なんてもう使わなくったっていいんだぜ。お前はもう子供じゃない、俺と対等の存在なんだからさ」
そうだろう、と同意を求めると少年は嬉しいような、困ったような色を浮かべ、しかし目上の方へそのような無礼は出来かねます、と呟いた。
帰れと言った折に見せられた強固な顔、そして戦闘中に見せられた鬼気迫る顔と今見せられている

情けない表情の落差がおかしかった。傍らでは仲魔に笑われ、足元では黒猫が呆れたような目で自らを見上げているのにも気付いていないようだ。横たわる彼へ最後の目礼を行い、海岸部に出る施設の出口を目指して歩み始めた自分の後に影のように寄り添いながら付き従う困り顔の少年へ向けて妥協案を出してやった。

「――じゃ、名前から始めようか」

「名前、ですか」

「【さん】はいらねェから。呼んでみな」

「‥‥、」

返事に窮し、何やら言いよどみ続ける少年をにやつきながら眺めていると、突如、建物内に振動が走った。表情を引き締め警戒の態勢をとり、晴海町を襲っている惨劇を思い舌打ちする。

周りを気遣わない力の行使は、駄々を捏ねているのと変わらない。なんであんた達にはそんな当たり前のことが解らなかったんだ。

「彼らには同情するが、あの化け物をこのままにはしておけない。行こう、」

頷いた少年と共に、晴海町方面へ抜けるため、黒猫の助言通り潜入してきた方とは逆方向の、自動電話出口へと通じる道へと足を向けた。

先程の振動で何処かの配線がやられたか。ぽつりぽつりと設置された電飾が時折ちかちかと瞬く。金臭いにおいのする廊下にコツコツコツコツと二つの靴音が反響する。

どれ程歩んだものか、地上へと繋がる自動昇降機の設置された扉の前へ差し掛かった時、後方に控える少年から蚊の鳴く様な声で呼ばれた。
おお、と思い足を止め、振り返る。
「え、何だって、聞こえな〜い、」
嘘だ。
だがそんなことはお見通しなのか、未だ戦闘の高揚が多少残っているらしき少年はおどけて訊き返す自分に向かってあからさまな舌打ちを寄越した。
未だ超力超神計画は阻止出来て居らず、事態は依然火急を要するままではあるのだが、今此の時だけはそんな深刻な状況など微塵も気にかからず妙に愉快であった。こんな時に巫山戯ている場合かと、何時もであれば厳しく接してくる黒猫も、何故だか静かに佇んだままで、我関せずとばかりに毛繕いをしている。浮遊する乙女は優しく微笑んだまま、皆を見守っている。嗚呼、いいなぁこういうの。
自分は、こういったものを守る為に、一人の人間として足掻くことを決めたのだ。
時間としては一、二分といったところか。少年は漸く其の重い口を開き、やけくそのように其の言葉を放った。
「鳴海、」
「はいよ、って、結局そっちで呼ぶのね。なんだ、」
「事態は一刻を争います、急いで探偵社へ戻りましょう」
そう言って早く進めとばかりにぐいぐいと背中を押す少年に逆らわず歩を進める。

「んー、矢っ張り他は敬語のままなんだな、」
つまんないの。‥‥けどまぁ、いいさ。追々な。
にやりと笑い、自動電話へと通じる扉を開けようとすると、其れを察した少年が先に手を伸ばす。
「腕を負傷なすっていらっしゃるというのに、何してるんですか」
何があるか分からないんだ、俺がやりますと主張され、何か答えるより先にボタンを押し扉を開け、奥へと押し込まれた。乗り込んだ狭い箱がしゅうう、と音をたてて上昇し、地上へと三人を運ぶ。やがて速度が落ち、がこんと何かに引っかかる音と同時に扉が開き其処から漏れる眩い光が目を焼いた。完全に開ききった扉から僅かに頭部を覗かせて外部を伺い、安全を確認した少年がこちらを振り返った。
「さぁ、行きましょう鳴海」
「ああ」
最早視線を逸らす事無く前を見据え、少年の言葉に応じた。

混乱の真っ只中にある舗道を走らなければならないタクシーなど利用する気になれず、二人（と一匹）揃って疲れた足を引き摺りながら徒歩で帰途に着いた。道が判らず途惑ったが、昔取った杵柄さとおどけた彼に裏道を案内され、事無きを得た。
何処で聞きつけたものか、晴海や銀座界隈より混乱は少ないものの、時折荷物を積んだ大八車を押し自主避難を行う人々に出くわし。其の都度、彼の傷に障らぬよう壁際へと誘導し、黒猫を無事な方

の腕で抱いてもらいながら庇い続けた。そんな自分の行為を当初は女のように庇う必要はない、と一蹴しようとした彼も、足下で黒猫が一声鳴いた途端、自らの負傷だけが其の行為を促すものではないと悟ったらしく、不承不承といった態で壁際に移動した彼の妙な子供っぽさに、彼の肩口から顔を覗かせた黒猫と目を合わせ、互いの口元に苦笑をのぼらせた。

そうして漸く筑土の地へと到着し、慣れた景色の中に存在する彼の姿に改めて安堵して涙が浮かびそうになったのは我ながら不覚だった。しかし何時もであれば何かと小うるさい目付けも、ただ目を細めるだけで見逃してくれたのでこうして何事もなかったかのような顔で居られた。

———故に。

先を進む彼の細い後姿と、彼の腕の中に居座る黒猫の、肩口から覗かせているしれっとした顔を睨みつけ、常に胸元に潜ませてある草に伸びそうになる手元を押さえた。

———今回ばかりは勘弁してやる。

そんな些細な事で悋気を飛ばしている場合ではないということは判っているが、それでも承服し難かった。恋の病は業が深いと称される所以はこのようなところにあるのだろう。

ぐるぐるした思いを抱えながらやっとのことで探偵社へと到着し、彼より先に歩を進め扉を開けて迎え入れる。其処で漸く腕の中から黒猫を解放した彼は、やれやれと呟きながら帽子を外し、扉側へ佇んだままの己に向き直った。

「さて、解決すべき問題も為さねばならんことも山のようにある訳だが、先ずは英気を養うため、休息をとることを提案する」

晴海の町の惨状が一瞬脳裏を過ぎったが、仲魔の回復魔法でも癒しきれない疲労が蓄積しているのを感じ取り、了承の意を示した。そんな自分の姿を彼は満足そうに見詰め、自分のデスクに軽く寄りかかりながら微笑んだ。

「それじゃ改めて。‥‥おかえり、ライドウ」

はっと彼の人の顔を見詰める。固まり続ける自分を何時もの場所で、何時もの暖かい微笑を浮かべながら、何時もの迎え入れる言葉を口にした彼の姿を見詰めた。

「――只今、戻りました‥‥」

腑抜けた声で返答した自分を笑いもせず、彼はうん、と頷いて流した。こういったところが相変わらずずるいと感じるがこれもまた彼と自分の経験の差というものなのだろう。

悔しさが滲んでしまったであろう顔を隠すため、彼へ背を向けながらマントを外し軽く埃を払った後で何時もの場所へと掛ける。振り返ると、穏やかに微笑んだ彼がいた。

思えばこうして彼へ向かって帰社の挨拶を口にし、装備を解く様を見せるのは幾日振りか。彼の迎え入れる言葉が自分の身に沁みたように、彼もまた自分の姿を見て其れを同じように感じてくれているのだろう。

じわり、と心が温かくなった。名と共に自らの背負った役目が一体何なのか。その意味するところを再び実感する。みっともない表情を晒している自らの顔を帽子で隠し。

「お帰りなさい」

揺らぐ感情を押さえる余り挑むような響きになってしまった一言を投げかけると、彼は心底驚いた

ようで。目をぱちぱちと瞬かせた後、気恥ずかしそうに頬を染め、微笑んだ。
「・・・ただいま」
そう応えた後照れ臭さが最高潮に達したのか。彼はふいと自分から視線を逸らしたが、僅かに覗く目尻が赤くなったままなのが目に入った。温かくなった心が、震えた。
潤んだ目で彼を注視する自分の足元にひょこひょこと歩み寄った黒猫は、彼と自分を交互に見遣った。
ニャア（湿っぽくなる気も判らんでもないが。あやつの怪我を放っておいていいのか、）
応急処置はさせたものの、あの状態では化膿し発熱を引き起こしても不思議ではない。
そう指摘した黒猫の声にそういえばと思い至る。突然変わった気配に驚いたのか。目を見開いた彼の傍へ歩み寄り、無事な方の腕を掴んだ。狼狽する彼を強引にソファーへと落ち着かせる。
「おいおい、何だってんだよいきなり」
苦情を洩らす彼に構わず、すっかり馴染みになった十字模様の刻まれた木箱を引き寄せ、治療薬品や用具を手元に寄せる。察せたらしく、彼は苦笑しながら首を横に振った。
「・・・これくらいの怪我なら自分で手当てできる。お前の方が疲れているんだから、少しでも休んでおきなさい」
其の通りだ。彼の意見は正しい。だが今回ばかりは物分りの良い振りをする気にもなれない自分は彼の言葉を無視し、無言でその上着に手をかけた。
「おい、ライドウ、」

「――――黙って」
「ちょ、おい、痛っ。平気だって、弾が掠っただけだ。中毒を起こす程のものでもないんだし、大したことないって。‥‥全く、心配性な上に強引なんだから」
「だったら尚のこと、傷口を見せて安心させてください」
苛立たしげに要求する自分に折れる気になったのか。彼は背を向け、上着を預けた。
傷口の周辺部分が赤く染まり、それを更に囲う形で薄い染みが広まっている襯衣の袖に扉手が寄る。凝固した血液と体液によって負傷箇所に貼り付いてしまった左袖部分はそのままに、脱ぎ難そうにしている右腕部分を抜くのを手伝う。あーあ、すっかり駄目になっちまったなぁとぼやく彼の、次第に現れていく鎖骨や肩甲骨、引き締まった背筋のラインに少々動揺しながらも鋏を手に取り、染まった傷口周辺を残して裁断した。消毒液の匂いが鼻をつくだろうに、それでも傍を離れようとしない目付けの翠の双眸が見守る中、脱脂綿に含ませた消毒液で周辺を湿らせ、傷口に障らないよう貼り付いた襯衣をゆっくり剥がしていく。赤黒く染まった脱脂綿を次々と屑籠に捨て、やがて姿を現した傷口を、新たに湿らせた脱脂綿で消毒を行う。
相当痛むだろうに、痛いと口にするどころか微塵も表情に上らせない彼に腹立たしさが募る。大嘘つきな彼を懲らしめようと、消毒薬に濡れた脱脂綿を傷口に強めに押し付けてやると流石に我慢し切れなかったか、情けない悲鳴を上げた彼の姿に漸く溜飲が下がった。
「‥‥ちょっと、さっきから妙につんけんしてない、ライドウちゃん」
「そりゃあね、色々思い出したら腹が立ってきたので」

「えーなんで」
眉尻を下げたまま振り向いたその顔へ向けてぼそりと呟く。
「――銃撃無効」
「・・・え、」
化膿止めを手に取り、傷口へ塗りたくりながら続ける。
「スクナヒコナの話です。耐性があるどころじゃなかった。・・・銃撃自体が効かなかったんです」
それが何を示すかと言いますと。
ガーゼをテープで留め。包帯を巻きつける。
「宜しいか、・・・若しあの時、貴方が御一人で彼と相対していたとしたら。一矢報いるどころか、抵抗らしい抵抗をする暇もなく、――命を奪われていたということです」
沈黙が満ちた中、無言で包帯を留め、道具類を片付けて立ち上がり背を向ける。
「でも、もう、いいんです。・・・貴方が無事で、本当に良う御座いました」
タオルと湯を持って参ります、と言い置き、そそくさと其の場を後にした。

「参ったなぁ・・・。暫くあいつに頭が上がらなくなりそうだよ」
黒い後姿を黙って見送った後、直ぐ傍にある自分の身体を撫でまわしながら呟く男にニャオと鳴けば、取り付く島もない其の響きに男は苦笑した。
「ゴウトさんにも、ご迷惑をおかけしました」

あーこんなとこ怪我してる、痛い、と心配そうに自分の前足に触れ、固まりかけた傷口を覗き込んでくる男の額を、爪が立たないよう気をつけながらぺちりと軽く叩いた。そうして背だの首だの頭だのを好きなように撫で続けさせてやると、やがて男は穏やかな微笑を浮かべ、静かに告白した。

「お前さんたちが来てくれたとき、」

何時に無く神妙な様子に頭を向ける。

「酷く驚いたのと同時に、———心が、震えたよ」

柄にも無く、さ。

「———ありがとな」

最後にぽつりと呟いた後、照れ隠しか。再びわしわしと乱暴に撫で付ける男の様子に、小僧よりましとはいえ矢張りこやつもまだまだ子供だな、と黙って其の手を受け止めた。

そうして中々戻ってこない弟子のことを考え。大方バスルーム辺りで鼻でも啜って居るのだろうと予想をつけ。嗚呼これだから子供というものは、だの、未だ未だ為さねばならんことがあるというのに何を呑気な、だのといった、これまで幾度思ったか知れない苦々しい思いが再度胸中を飛来し。しかし消しきれない温かいものが何より己が心を満たしているのを感じて、どれ程生きようとも消しきれない甘さを抱えている己が、若しかしたら一番まだまだなのかもしれないなと苦笑した。

・軍事戒厳・・・

大日本帝国憲法第十四条に規定される天皇大権の一つ。戦時または事変に際し兵備を以って全国、或いは一地方を警戒する権能行為。関東大震災や二・二六事件の際に発動されたのは、行政戒厳と称される、憲法第八条の緊急勅令によるものである。

・板橋の事件・・・

東京板橋の集落で起きた『もらい子殺し事件』のこと。

・水仙・・・

武士が切腹する折に飾られる花。またこれにより永久の別れを比喩する。一八九六年、「文学倶楽部」に発表された樋口一葉の「たけくらべ」で、僧侶の学校へ行くことになった信如が、吉原に住む美登利に最後に贈った花としても有名。

・羅宇屋・・・

煙管の管（羅宇）を掃除する生業を営む店のこと。